は誰でもわれ決してこれを棄てずである」。私は今でも能く記憶してゐるが、惡魔は私から此聖語を取去らうと思つて種々と莫迦にして見たが、併し彼は「それでも卿は眞直に來たか」といふ問を發しやうとは仕なかつた。斯る問を發しなかつたのは、眞直に來るといふことはどんな事であるか、充分私が能く知つてゐると想つた故であらう。眞直に來るといふことは、私が在來の儘で來ることである。即ち賤しい不敬な罪人として來ることである。そして自ら罪を定めつゝ、仁惠の足許に身を伏せることである。惡魔と私とが懸命に神の言葉を奪ひ合つたのは、取も直さず基督の此の善き言葉であつた。惡魔が一方の端を握めば、私は他の端を握んだ。あゝ、我等はいかに力を盡せるよ。約翰傳にある此言葉を引張つたり、引張られたりした。惡魔も力を出した。私も力を出した。神は讃むべきかな。私は惡魔に勝つた。そのために氣が晴々した。

斯る助力と恩寵の祝福ある言葉にも係らず、長子の權を賣つたエサウのことが、尙ほ折々私の良心を惱ますのであつた。最も快く慰められたばかりであるのに、その事が胸に浮んで來ると、また怖を生ずるのであつた。それが毎日の

事などで、私はそれから通れる事が出來なかつた。そこで私は他の方法を講じた。それはこの不敬な思想の性質を考へて見ることである。その言葉を廣い意味に取つて、その各の言葉が自然に歸する所に赴かしめたらばどうであらう。それを公平に解釋して見ると、恁う云ふことになる。「主耶蘇基督が私の救主であるかどうか、自由に彼の選擇にまかすことである」。それは取も直さず、「彼が欲するならば勝手に行かしめよ」といふ惡い言葉の解釋である。然して「われ爾を去らず、更に爾を棄てず」(ヘブライ十三〇五)といふ聖語は私に希望を與へた。「あゝ主よ、されどわれは爾を棄てず」と私は言つた。再び私に答へて曰く、「されどわれは爾を去らず」。これに依つて私は又神に感謝した。

尙ほ私は基督に棄てられることを痛く懼れた。あまりに彼を怒らしたので、今更彼に賴ることが非常に困難であつた。この邪惡な思想が決して浮ばなかつたならば、どんなに嬉しかつたであらう。一層安らかに自由に彼の恩寵に賴ることが出來たらうと想つた。私はヨセフの兄弟のやうであつた。彼等はその邪惡な罪を想ふては、遂には弟に賤しめられることを懼れて幾度か胸一杯になる

のであつた（創世記五十〇十五、十六以下）

有ゆる聖語の中で、尙ほ私を最も大に慰めたのは、人を殺せる者に遁れる道を語る約書亞記第二十章であつた。モーセは言つた。「假令仇打ちする者追ひゆくとも、彼等その人を殺せる者をこれが手に渡すべからず。そは彼知らずして人を殺せるにて、素よりこれを憎みをりしにあらざれば也」。この言葉のために、あゝ神は祝福すべきかな。私は人を殺せる者である。仇打ちする者は私を追てゐる。私は大なる恐怖を感じた。私が逃遁の邑に入る權利があるかどうか、未だそこに疑問がある。そこに入る權利のある者は、「血を注がんと待構へたる者であつてはならぬ。知つてなせる人殺しではない。知らずしてなせる者である。不注意になせる者である。怨恨猜忌惡意からでなく、知らずして血を注げる者である。「素よりこれを憎まざりし」者である。然らば甚麼か。

想ふに私は眞にそこへ入らねばならぬ人である。私は「知らずして、素より彼を憎まず」して、彼を殺害した。私は素より基督を憎んだのではない。否、私は彼に祈つた。彼に對して罪を犯すまいと心掛けた。然り、この邪惡なる誘惑に

對して、私は十二ヶ月も爭つた。それは私の胸に入込んだが、私はそれに抵抗した。私はこの逃遁の邑に入る權利がある。長老といふべき使徒等は私を引き渡しはしないと想つた。故にこれは私にとりて大なる慰めとなつた。希望を懷くべき多くの理由を私に與へた。

極めて批評的に言へば、私が支へられる充分確かな理由を知らぬならば寒心に堪へぬ次第である。そこで私の靈魂は一つの疑問を解決せんとする願望を持つた。その疑問は、「赦されざる罪を犯した人が、假令少くとも基督を通して神から眞正の靈の慰安を受くることが出來るかどうか」といふにあつた。熟々それを想ひめぐらして、私は「否、出來ない」といふ答を見出した。それは左の理由からである。

第一、その罪を犯した者は基督の血に配かることを禁ぜられてゐる。又それから閉されてゐる故に、希望を懷く理由もあまりないし、靈の慰安も獲られぬ譯である。曰く、「このほかに罪を贖ふ犧牲なし」（〇廿六、廿七、十）。

第二、彼等は生命の約束に配ることを拒まれてゐるからである。曰く、「この

世に於ても亦來るべき世に於ても赦さるべからず」（マタイ十二〇廿二）

第三、神の子は彼等がその祝福の懇求に配ることを禁じられた。聖き父の前に、又天の祝福の使者の前に彼等を認むることを永久に恥ぢたまふのである（可馬廿八七〇）

私はこの事について多くの思慮を費した。そして主は私が邪惡な罪を犯した後でも、私を慰めたまふことと斷定せざるを得なかつた。併し私はいと怖ろしくも恐ろしきこの聖語に敢て近づかうとしなかつた。その聖語は始終私を非常に威嚇すのであつた。實際それは私を滅ぼしさうであつた。私は成るべくそれから眼を外した。幾度となく聖書にそれがなければ可いがと想ふことを禁じ得なかつた。それでも今や私は心を勵まして、近づいてそれを讀んだ。それを考へた。その目的と趣旨とを測らんとした。

私がさう仕始めると、その聖語の面影が變つて來た。これまで想つたほど獰猛には見えなくなつた。先づ第一に希布來書の第六章を見た。すると怖ろしさに身が慄ふのであつた。併しそれを想ひめぐらして見ると、そこに記せる墮落は全く墮落し去つたことである。私の認むる所によれば、耶蘇基督によれる福音を絶對に拒み、その罪の赦免を絶對に拒むところの墮落である。使徒はそれからして、一、二、三、四節の議論を始めてゐる。第二、この墮落し去るといふことは、世人の眼の前にも、基督に公然恥を與へるやうな陽はなものでなければならぬことを見出した。第三、そこに記されたる者は盲目と無情と頑强とのために永久神から閉出されることを見出した。即ち「復これを悔改に立ち返らすことは能はざるなり」である。斯く至細に見て來ると、誠に有難いことには、私の罪は茲に記されたやうな罪でないのである。

第一、私は墮落したことを白狀するが、墮落し去つたものでない。即ち耶蘇に對する信仰告白から始めて、限りなき生命に至るまで墮落し去つたのではない。

第二、私はわが罪に依つて耶蘇基督を恥かしめたことを白狀するけれども、基督に公然たる恥をかゝせなかつた。私は人々の前に彼を拒まなかつた。世人の目前に果なき者として、彼を批難しなかつた。

第三、私は神が自分を閉出して、悲哀と悔改とに依つて彼の許へ往くことを拒まれたことを見出さなかつた。(勿論私が彼の許に往くことは困難であつた)。測るべからざる恩寵に就て神は祝福すべきかな。

次に希布來書第十章の第廿六、廿七、廿八、廿九節を能く考へて見ると、そこに記された放縱なる罪はあらゆる放縱の罪ではない。基督とその命令とを投げ棄つる罪である。第二、それは第二十八節にある通り、二三人の證の前に公然と律法を廢てねばならない。第三、この罪は恩寵の靈を侮るのでなければ行ふことが出來ない。即ちその罪を禁しめられ、これを犯さぬやうに勸められても、尙ほそれを侮つて行ふのである。けれども主は知りたまふ。假令私の罪が極惡であつても、未だそれほどではないことを。

希布來の第十二章にあるエサウが長子の權を賣つたといふ文字は、これまで私を殺した。私に對して槍の如く立つた。けれども今想ひめぐらして見ると、第一、「彼がそれを賣るといふことは、その心の不斷の働きであつて輕卒な思想からではない。寧ろ同意せられ、實行せられたる思想で、熟慮の結果である」(創世記廿五章三十二節)。第二、それは大勢の前でなくとも、尠くともその兄弟の前には公然となされたる行爲である。これは殊更に彼の罪を極惡なる性質たらしむるのである。第三、彼はいつもその長子の權を輕んじてゐた。「彼は食ひ且つ飲みて、起ち去れり」(創世記廿五章三十四節)とある。斯くしてエサウはその後二十年經つも、矢張その長子の權を蔑にしてゐたのである。エサウ曰く、「弟よ、われは足れり。汝の所有は汝自からこれを持てよ」(創世記廿三章九節)。

エサウが悔ゆる所を索めんとしたといふ事について、私はかやうに想つた。第一、彼が悔いたのは長子の權のためではない。祝福のためである。これは使徒の記せる所で明白である。又エサウ自らに依つても區別せられてゐる。曰く、「昔にはわが家督の權を奪ひ、今はわが祝福を奪ひたり」(創生記廿七章六節)。第二、かやうに考へてから、使徒の記せる所に引返して見ると、そこに新約の文體と文意で、エサウの罪に對する神の意を見ることが出來る。それが神の意であるといふのは、私の認むる所によれば、長子の權は復活を意味し、祝福は永遠の相續を意味するからである。使徒はそれを暗示したのである。「恐らくエサウの如く淫を

行ひ安なる事をなす者あらん。彼は一飯のために長子の權を賣れり」といふのは、新に生れるためにおのが身に現在ある神の祝福の始めを棄てゝ了ふと、エサウの如く、その後祝福を嗣んとしても拒けらるゝに至ることを示したのである。

恩寵と仁惠の日に於て、天國へ至る長子の權といつても可い事共を輕んずる者が多くある。彼等は審判の日が見ゆる時に、エサウの如く、「主よ、主よ、我等に聞きたまへ」と聲高く叫ぶであらう。けれどもイサクが悔いなかつたやうに、父なる神は悔ゆることなく、「われ彼等を祝福したれば、彼等は祝福せらるべし」(創世記廿七〇廿三)と言はれる。從つて斯る人々に對しては、「惡をなす者よ、去れ」(路加十三〇廿五|廿七)と言はれるに相違ない。

かやうに此等の聖語を想ひめぐらし、その意味を解釋して見ると、毫も他の聖語に反對してゐない。それと一致するのである。これは一層私の奬勵となり安慰となつた。そして又その反對に大打擊を私に與へもした。即ち、「その聖語は私の靈魂の救拯に同意しないのである」。今や暴風は唯その名殘を留めた。雷は私の頭上を過ぎ去つた。唯殘りの雨の雫が折々私に落つるばかりである。けれどもこれまで私の驚愕と苦痛とがあまりに嚴しく深かつたので、火を以て威される人のやうに、尙ほその聖語は私を嚇すのであつた。その一言一句は「火よ！火よ！」といふやうであつた。これが微に觸れる度毎に私の柔しい良心は害せられるのであつた。

一日私は野原を通つてゐた。すると急に私の良心は紊れ出した。凡て非なりと非觀してゐると、突然爾の義は天にあり」といふ文言が私の靈魂に落ちて來た。私は靈の眼を以て耶蘇基督が神の右に坐するを見た。そこにわが義があるのであつた。それ故私が何處に居つても、又何をしてゐても、神は私に對して、「爾はわが義を缺く」といふことが出來ないのである。わが義は恰度神の前に坐してゐるからである。それのみならず、私は自分の善き氣分に依つてわが義を善くしたり、又惡しき氣分に依つてわが義を惡しくしたりすることはないのである。わが義は「昨日も今日も永遠も變らぬ」耶蘇基督その人である(ヘブライ十三〇八)。

今や私の鎖は實にわが足下に落ちた。私はわが苦惱と桎梏から放たれた。わが誘惑は遁れ去つた。その時から神の此の怖ろしき聖語は私を惱ますなくなつ

た。今や私は神の恩寵と愛とを喜んで家に歸つた。私は家に歸つて、「爾の義は天にあり」といふ文言を見出すことが出來るかと思つて見廻はした。けれども斯る言葉を見出すことが出來なかつた。私の心情はまた沈まんとした。すると、哥林多前書一〇卅にある「基督耶蘇は神に立てられて爾曹の知慧、また義、また聖、また贖となりたまへり」といふ言葉を思ひ出した。この言葉に依つて、私は前の文言の眞正であることを悟つた。

この聖語に依つて、私は人なる基督耶蘇がその肉の生活において我等から異なつたやうに、又神の前に我等の義であり聖であることを悟つた。茲に於て私は暫くの間基督を通して神と偕に甚だ快く平和に暮した。基督のほか、私の眼の前には何もなかつた。私は今や基督の血とか、埋葬とか、復活とかといふやうに、その別々な恩澤を眺むるのみならず、圓滿なる基督として彼を考ふるやうになつた。即ち種々な恩澤を包含せる基督、その他の諸德も說話も職務も動作も凡て總合せる基督、天にあつて神の右に座せる基督である。

高調せられたる基督を見、又彼の恩澤の價値と優勝とを見ることは私にとり

て光榮であつた。今や私は私自身から基督を眺むることが出來た。想へば斯る神の恩寵は私にとりて若々しかつた。譬へば黃金を家の鞄の中に貯つておく富者がその財布の中に持つてゐるがちやゝ音のするグロート(銀貨の名)や四片半のやうなものであつた。あゝ、私は黃金が自分の家の鞄の中にあることを見た。それはわが主にして救主なる基督の裡にあるのである。今や基督は凡てゝある。凡てわが智慧、凡てわが義、凡てわが聖、凡てわが贖である。

それのみならず、神は又神の子と結合する奧義に私を導かれた。私はその肉の肉、その骨の骨であるかのやうに、彼に結び着けられた。以弗所五〇卅は今や私にとりて快き言葉であつた。その言葉に依つて、基督はわが義なりといふ私の信仰は一層確固になつた。基督と私とが一つであるならば、彼の義はわがものである。彼の恩澤はわがものである。彼の勝利は又わがものであつた。今や私は天に於ても地に於ても同時に自分を見出すことが出來た。即ちわが基督に依つて、わが頭腦に依つて、わが義と生命とに依つて、天に自分を見出し、わが身體若しくは人體に依つては地上に自分を見出すのである。

今や私は神から崇められる基督耶蘇を見た。彼は又その選民全體を常に顧慮し心配する共通にして公共の人物として我等に依つて崇られるのである。我等は彼に依つて律法を成就した。彼に依つて死んだ。彼に依つて死から甦つた。彼に依つて罪と死と惡魔と地獄とに勝つことを獲た。彼が死んだ時に、我等は死んだ。彼が復活した時に、我等は復活した。「汝の死ねる者は生き、わが死せる體と共に彼等は起きんと彼言ひたまふ」(イザヤ廿六〇十九)。そしてまた「エホバは二日の後われらを生き返し、三日にわれらを起せたまはん。我等その御前にて生きん」(ホセア六〇二)。斯る豫言は天の神の右に人の子の座することに依つて成就せられたのである。以弗所書によれば、「又耶蘇基督に在る我等を彼と偕に甦らせ、共に天の處に座せしめたまへり」(二〇六)とある。

あゝ、斯る祝福の思慮と聖語とはそれと同じ性質の他の多くの事と共に、當時わが眼に輝く金箔となつた。そして私をして次のやうに言はしめた。「エホバを讃めたゝへよ。その聖所にて神を讃めたゝへよ。その能力のあらはるゝ穹蒼にて神を讃めたゝへよ。その大能の働きの故をもて神を讃めたゝへよ。その秀て大なることの故によりてエホバを讃めたゝへよ」(詩百五〇十、一二)。

以上述べ來れるところに依つて大畧わが邪念邪想より來れる罪と怖とに依つて、わが靈魂がいかに悲しみと惱みとを味ひしかを讀者に示した。又私がそれから救れて、その後快美なる祝福の慰安に遭遇し、十二ヶ月の間その慰安はわが胸裡に宿つて、語るべからざる讃歎の情となつたその一般を讀者に示した。神喜びたまはゞ、更に筆を進むるに當りて、遂にはわが靈魂の益となつたこの誘惑の原因と認むる所のことに數言を費したいと思ふ。

種々なる原因を尋ねて見て、重にそれが二つであることを認めた。その二つの原因のために私は二六時中この惱苦になやまされたことを深く信ずるに至つた。その第一の原因は私がこれまでの誘惑から救ひ出された時に、尚ほ來らんとする誘惑から自分を護りたまふやうに神に祈らぬことであつた。事實を言へば、この試練に捕はれる前に私の靈魂は餘程祈禱の裡にあつた。けれども私の唯祈る所は、若しくは重に祈る所は、現在の惱苦の取除かれんことであつた。基督における神の愛の新しき發見のためであつた。その後私は自分の祈りが足

りなかつたことを悟つた。私は又大なる神が來らんとする惡から私を護らんことを祈らねばならなかつた。

これに就て私を深く感動させたのは、聖なるダビデの祈禱であつた。彼は現に仁惠の下にありながら、來るべき罪と誘惑から自分を引留めんことを神に祈つた。彼は言ふ。「されば われ純正しき者となりて、大なる愆を免かるゝをえん」(詩十九三)。この言葉こそ、この永き誘惑を通して、全く私を惱ましし、批難するものであつた。

尙他に又この義務を忽せにした私の莫迦らしさを非常に批難する言葉があつた。曰く、「この故に我等恤みを受け、機に合ふ助となる仁惠を受けんために憚らずして恩寵の座に來るべし」(四〇十六)。私はこれを爲さなかつたので、それ故罪と墮落に苦しんだ。それは「誘惑に入らぬやう祈れ」と記されてゐる通りである。實際この事は今日まで私を壓へつけ又嚇してゐる。それから私は主の前に出る毎に、來るべき誘惑に對して助力と仁惠とを願はずに、膝を伸すことをせぬやうになつた。讀者よ。私が卿等に求むる所は、私がこの事を忽かせにしたために、日として月として年として悲しんだその惱みを見て、學ばんことである。

この誘惑の尙一つの原因は、私が神を誘惑したことである。その仕方は恁うである。ある時私の妻が妊娠してゐた。產月になると、分娩時の女の如く、その苦痛は激しく强かつた。妻は直ぐ產褥について、早く產んでしまひたいと想つたほどである。恰度その時であつた。私は神の存在を疑ふやうに强く誘惑された。妻は私の側で泣きながら臥つてゐた。私は心窃にこんなことを想つた。

「主よ、爾は今私の妻からこの痛しき苦しみを取去りたまへ。妻が今夜最早惱まぬやうにしたまふならば、(恰度その時妻は苦しんでゐたので)、私は爾が心情の最も秘密の想ひをも見顯はしたまふことを悟るでありませう」

私が心の中でさう言ふと間もなく、妻の苦痛は取去られた。妻は熟睡して、朝まで能く眠つた。茲に於て私はたゞ〳〵慨嘆するばかりで、考ふる所を知らなかつた。それから暫くして私は目を醒した。妻の泣聲は最早せぬので、私は又唾眠に落ちた。私は翌朝目を醒すと、昨夜胸中で言つたことを又思ひ浮べた。神が私の秘密の思想を知ることを示されたことは、その後數週の間私にとりて

大なる慙愧であつた。

その後一年半ばかりして、前に語つた通りの罪深い邪しまな思想が私の邪な胸裡に入つて來た。それは即ち「基督をしてその欲するまゝに勝手に行しめよ」といふ思想であつた。私はこの思想のため罪に墮ちてゐたが、その時他の思想とその結果とを思ひ出した。即ちそれは神が心情の最も秘密な思想を知りたまふことを示されるといふことである。これは前の思想をやり込めたり非難したりした。

それと同時に主とその僕ギデオンとの間にありし事柄はわが胸に落ちて來た。ギデオンは神の言葉を信じてそれを敢て行はんとするに當りて、羊の毛の濕たのと乾いたので神を試みんとした。それ故主はその後彼を試むる爲に、無數の敵軍に對して彼を遣はされた。外見には何等の力も援助も與へられなかつた。(士師記六〇七)矢張かやうに神は私を取扱はれた。それに依つて私が神の言葉を信じ、見ざる所なき神に對して「若しも」といふ語を發せざるやうにされた。

次に私がこの誘惑に依つて獲た利益の二三を讀者に示さう。第一、私はこれ

に依つて神とその愛子の祝福と光榮とに對して自分の靈魂の裡に甚だ驚くべき感覺を持ち續けるやうになつた。前記の誘惑に於て、私の靈魂は神の存在と基督と聖言の眞理と來世の確實とに對して不信仰と誹謗と無情と疑問とに惑亂された。嘗て私は無神論を以て大に攻擊され苦しめられたこともある。然るに今や別種の場合にあつた。今や神と基督とは絶えずわが面前にあつた。併しそれから慰めを受くるのでなく、非常な畏伏と恐怖とを受くるのであつた。聖なる神の榮光はこの時片々に私を碎くのであつた。基督の惻隱と憐憫とは車輪を以ての如く私を碎くのであつた。私は失はれ拒けられたる基督としてのほか彼を考ふることが出來なかつた。それを想ひ出す毎に、私の骨は絶えず碎くるやうである。

聖書は又私にとりて驚くべきものであつた。その眞理と確實とは天國の論であることを悟つた。聖書を愛するその人は祝福を嗣ねばならぬ。聖書に叛き、これを批難するその人は永久滅びねばならぬ。あゝ「聖書は毀るべからず」といふ言葉はわが心情の網膜を裂くのであつた。「爾曹人の罪を赦さば、彼等は赦され、

爾曹人の罪を保たば、彼等は保たるべし」。今や私は使徒達を逃遁の邑の長老と思ふに至つた（十〇四アニ）。彼等に受容れられる者は生命に受容れられるのである。然るに彼等に閉出される者は仇打つ者に殺されるのである。

あゝ、聖書の文言の一つはわが心を惱ましめ懼れしむるのであつた。その文言は（時としてその一言一句でも）四萬の軍勢が私に對して來るよりも一層私を襲撃するのであつた。聖書に依つて攻撃せらるゝ者は禍なるかな。

この誘惑に依つて私はこれまでよりも約束の言葉の性質が一層解るやうになつた。それは絶えず私が神の義の雷聲に毀れ裂れて、神の大なる御手の下に慄へながら横になつてゐたからである。そのために私は注意深い心情と油斷をしない眼を以つて、畏れ懼りながら聖書の一枚〳〵を繙いた。大變熱心に身を慄はせながら、その各の文言を考へて。その自然の力と廣さに想ひ及んだ。

私はそれまで愚かにもわが心に浮び來る約束の言葉をその儘棄て置いたが、この誘惑に依つてそんな事をせぬやうになつた。私は骨てその約束から慰安と快美とを吸つたが、今はそれが出來なくなつた。尙ほ沈みゆく人のやうに、見

えるものには何でも捕えやうとした。これまでは約束から慰安を感ずるのでなければ、それに與ることが出來ぬと思つたが、今はそんな猶豫のある時ではなかつた。仇打つ者は間近く私を追ひ來るのであつた。

それ故に私は恐らく自分が有するだけの理由も權利もないその言葉を喜んで捕えんとした。恐らく自分にはその心を閉ぢてゐる約束の胸の裡に飛び込まんとさへした。今や私は神の口から發せられたまゝにその言葉を執らんとした。その一字一畫の自然の力をも抑へないやうに努めた。あゝ、今や私は「我に來る者はわれ決して棄てず」といふ約翰傳第六章の祝福の言葉を見た。又私は自分の心情を以て受容れることが出來るよりも、神は一層大なる口を以て語りたまふことを考ふるに至つた。又私は神がその言葉を發せらるゝ時には急がず又無分別に熱せず、無限の智慧と判斷とを以て、又眞理と忠實とを以てせらるゝことを想つた。

私は當時屢々最も大なる苦痛を以て神の約束の方に蜿くのであつた。（恰かも馬が泥土に脚を踏み込んで、堅い地の方に蜿くやうであつた）。（恐怖に依つて氣

が茫然した人のやうに)私はその約束に憩ひ、そこに留まつて、これを造りたまへる天の神にその成就せられんことを任せんと決心した。約翰傳の祝福ある第六章に就て、私の心情は惡魔に對して、あゝ、いかに多くの爭鬪をなせるよ。私はこれまでと同じく今も唯慰安を望むやうなことは仕なかつた。(勿論その慰安はいかにも私の歡迎する所であつた)。けれども唯一言。疲れたる靈魂が永久に沈まざらんために、賴るべき一言こそ、私の追求する所であつた。

然り、私は屢々その約束を考へて見ると、恰かも主が永久私の靈魂を拒みたまふやうであつた。屢々私は山の頂に駈け上るやうであつた。主は焰の劍を以て、私を寄せつけぬやうに脅されるやうであつた。それから私は律法に叛ける王の許に往つて歎願せるエステルのことを考へた(エステル傳四〇十六)。私は又頭に繩をまいて敵陣に往つて憐れみを乞へるベンハダットの僕のことを考へた(列王紀略上廿〇卅一)。又基督に犬と呼ばれても畏縮まなかつたカナンの婦(マタイ五〇廿二十)や、夜半に麵麭を借りに往つた男(ルカ十一五—八)は私にとりて大なる奬勵であつた。

私はこの誘惑の後のやうに、恩寵と愛と仁惠の高さと深さとを嘗て見たことがなかつた。大なる罪は大なる恩寵を產んだ。罪の最も甚ろしく激しき所には、基督にある神の仁惠が人の靈魂に最も高く力强く示されるのである。ヨブはその艱難を通過した時に、「その所有物を二倍に增された」(ヨブ記四十二〇十)。わが主耶蘇基督のために神は祝福すべきかな。茲に尙ほ他に多くの述ぶべき事があるが、くだ〳〵しき故それを省く。希はくは神よ、私の損傷に依つて、人々が罪を犯すことを畏れしめたまへ。彼等をして私が爲して來たやうに鐵の軛を擔はしめたまふ勿れ。

私はこの誘惑から救ひ出される間に二三回、不思議にも神の恩寵を懼れてその下に堪ゆることが出來なかつた。神の恩寵が私にも施されることを想へば愕然度を失つた。それが長く私に宿ると想ふだけでも、仕事に手が着かぬほどであつた。

今や私は進んで、他の種々なる時期に於て私に對する主の待遇及びそれと同時に私の出遇へる誘惑の說話を讀者に與へやうと想ふ。先づ第一にベッドフォードで神の人民と友達になつて遭遇した事から始めやう。その後私は敎會に向

つて自分の願望は彼等が認許せる基督の命令と儀式の内に彼等と偕に歩まんとするにあることを建言した。基督の祝福ある儀式は彼が死する前に當りて、弟子達と偕に最後の晩餐をなされたことである。「これに依つてわれを記憶せよ」(カル十二〇九)この聖語は私にとりて甚だ貴き言葉であつた。それに依つて主はわが良心に來りたまふと同時に、彼はわが罪のために死にたまへることを發見するのであつた。その時彼はその同じ言葉の力を以つて、私を沈沒せしめられたやうに感じた。けれども見よ、私は久しくその儀式に與らなかつた。否、私はその儀式を誹謗した。そこに飲食する人々に何か危險なる事が起れば可いとは、始終私に伴へる激烈な傷しき誘惑であつた。そこで私はこんな邪な畏しい思想が若し滿足されるやうな折でもあつたら罪深いことだと想つた。そして身を屈して、斯る誹謗から私を留めたまふやうに神に祈らざるを得なかつた。それから又麵麭と杯とが彼等の口から口へ進みゆく時に、これを祝福せんことを神に叫び求めた。この誘惑の理由を後から考へて見れば、最初に起つた尊敬の念を以てそれに近づかない故であつた。

斯くして一年の四分の三は經つた。その間毫も安心せず、氣樂にもなれなかつた。けれども遂に主は前に私の靈魂を訪へると同じ聖語を以て私の靈魂に入つて來られた。その後私はいつも十分愉快にこの祝福の儀式に配かるやうになつた。私はそれに依つて主の身體が私の罪のために破れ、その貴き血が私の惡のために注がれたことを曉つた。

一時私は肺病になりかけたことがあつた。春頃突然激烈に冒されたので、わが外なる人は益々弱くなつた。長くは生きられぬと想つた。今や新に私は來世における自分の有樣と境遇を眞面目に吟味することに一身を委ぬるに至つた。來るべき祝福の世界を自分だけに證明せんとした。平素、否、特に艱難の日に、來世に關する興味を眼前に明かに保たんと努むることが、私のいつもの慣習であつたことについて、神の聖名を祝福する。

けれどもこれまで神が私の靈魂になしたまへる善事に就て自分の經驗を想ひ出して見ると、直ちに私の心に群がつて來るのはわが無數の罪と惡とであつた。その中でも此時最も大なる惱みとなつたのは、即ち私が聖なる義務に對して活

氣なく遲鈍で冷淡なことであつた。あらゆる善事に對して、自分の心情の彷徨と倦怠、神とその途とその人民とに對する自分の愛の缺乏せることである。畢竟ところ、「斯の如きは基督教の結べる果であるか。又これは祝福ある人の徵候であるか」といふにあつた。

斯る事を惱れるために、私の病氣は二重になつた。今やわが內なる人も病に罹つた。私の靈魂は罪に累はされた。神が私に善をなされたといふこれまでの實驗は全くわが心から取去られた。そんな事は決して無かつた。見たこともないといふほど隱れてしまつた。今や私の靈魂は「生きてもゐられず、死ぬこともできず」といふ二つの思慮の間に苦しき板挾みとなつた。私は氣が沈んだ。力が拔けた。全く落膽してしまつた。然るに私が禍の極みに陷つた人のやうに、家の內をあちこち歩いてゐると、神の言葉は確と私の心情を捕えた。曰く、「唯耶蘇基督の賜に頼りて、神の恩寵を受け、功績なくして義とせらるゝなり」(ロマ〇廿四三)。あゝ、いかにこれは私を轉化せるよ。

今や私は惱ましき睡眠と夢から醒めた人のやうであつた。この天來の文言に接して、私は恰かもかやうにその說明を聽く心地がした。「罪人よ、汝はその罪と不義との故に、私が汝の靈魂を救ふことが出來ぬやうに考へる。けれども視よ、わが子は私の側に居る。私は彼を見る。汝を見るのではない。私は彼の悅ぶやうに汝を處置するばかりである」。茲に於て私は大に發明された。神は何時か罪人をも義とせらるゝことを悟つた。神は唯基督を見たまふ。基督の恩澤を我々に歸せられる。その業は即刻に成るのである。

私がかやうに沈思してゐると、「我等のなせる義の働きによるにあらず。唯その矜恤に從ひて、我等を救へり」(テトス三〇五)といふ聖語が大なる力を以てわが靈に入つて來た。今や私は高く揚られた。恩寵と仁惠の腕の裡に自分を見出した。前には臨終の時を考へると怖ろしかつたのが、今や「われをして死なしめよ」と私は叫んだ。死は私にとりて愛らしく又美はしく見えるやうになつた。それは「來世に往くまでは、實際生きてゐるのではない」と悟つたからである。あゝ、想へば、この人生は來世に較ぶれば微睡に過ぎない。この時又私はこの世に生きてゐる間に言ひ現らはすことが出來るよりも、もつとそれ以上に「神の後嗣」(ロマ

十七〇）といふ言葉を悟つた。即ち「神の後嗣」といふのは、神それ自身が聖徒の資産であることである。私はこれを見、これを慈いた。けれども私は見たところを讀者に語ることが出來ぬ。

又他の時私は甚だ不快で弱つてゐた。その時も亦誘惑者は強く私を惱した。（彼はこの靈魂を攻擊するとに骨折つた。それが墓場の方に近づくのは、彼にとりて好機會であつた。彼は神がなしたまへる善事に就て私のこれまでの實驗を私から隱さうと努めた。又死の恐怖と神の審判を私の前に見せつけた。この時私は（今死ぬならば）永久の失策であるといふ心配のために、死が來る前に既に死人のやうになつた。既に地獄に下つたやうな感じがした。そこに途がないから、地獄へ往ねばならぬと想つた。けれども視よ。斯る恐怖の眞際中に、天使がラザロをアブラハムの胸に運んだといふ言葉が私の許に飛んで來た。そして「卿がこの世を去る時にもかくあるべし」と誰か言ふやうであつた。これはわが靈を快く蘇生らせた。神を望むやうに私に力を添えた。暫時嬉しくも默想してゐると、わが心にどつしりと落ちた言葉があつた。曰く、「あゝ死よ。爾の刺は何處にあるや。あゝ陰府よ。爾の勝は何處にある」（五〇五十五前十）。茲に於て私は身も心も一時に輕くなつた。わが病は直ちに消え去つた。私は再び愉快に神のために仕事をするやうになつた。

又他の時それまで元氣よく氣分も爽かであつた私は、突然大なる黑雲に蔽はれた。神と基督の事を、生れてから見たこともなく知つてもゐないといふほど私から隱してしまつた。感じのない惰ない氣分はわが靈魂に濕つた。わが靈魂は基督に依つて恩寵と生命とに動かされ刺激されなくなつた。恰かもわが腰は破られるやうであつた。手足は鎖で縛れるか繫れてゐるやうであつた。この時又私はわが外なる人を捕捉するにはあまり衰弱してゐた。內なる人の惱苦は私にとりて益々重々しく不愉快であつた。

こんな風にして三四日經つた。私が火の側に座つてゐると、突然私の心情に響く言葉があつた。曰く、「われは耶蘇に往かざるべからず」。茲に於てこれまでの暗黑と無神論とは遁げ去つた。天の祝福ある事共はわが目前に置れた。私はこの唐突に氣を轉倒させながら、妻を呼んだ。

『われ耶蘇に往かざるべからず』といい聖語は何處にあるか」と私は言つた。妻は知つてゐないと言つた。そこで私は尙ほ默座して何處にあつたか思ひ出さうとした。座つて二三分間以上にもならぬに、稻妻の如く躍り出したのは、「天の使の無數の團集に」といふ語であつた。それと共に希布來の第十二章にあるシオン山のことが、わが眼の前におかれた（〇ヘブライ二―廿二―廿四）

欣然として私は妻に言つた。「あゝ解つた。解つた」。その夜は私にとりて良き夜であつた。それほど良き夜は極めて稀であつた。神の人民の仲間に向つて、神が私に示現された所を配でやりたかつた。基督はその夜わが靈魂に貴き基督であつた。基督を通して獲られたる歡喜と平和と勝利とを想へば、どうしても床に就けなかつた。この大なる榮光は朝まで繼いた。希布來書第十二章はその後幾十日の間私にとりて祝福の聖語であつた。

その言葉に曰く、「爾曹の近づける所は、シオンの山、又活ける神の城なる天のエルサレム、天使の無數の團集、天に錄されたる長子等の總會と教會、また凡ての審判人なる神、および完全せられたる義人の靈魂、新約の中保なる耶蘇および灑ぐところの血なり。この血の言ふところはアベルの血の言ふところに愈れり」。この祝福の文言を通して、主はこの言葉から始めて、それからそれへと次第に私を導きたまふ。その一言一句は驚くべき榮光を私に示した。この言葉はその時以來屢々わが靈の大なる清涼劑であつた。私に仁惠を垂れたまへる神は祝福すべきかな。

三　バンヤンの傳道と說教

今や私は自分の實驗を語らんとしてゐる。私が聖言を宣傳せること、及び特にその事に就て神の私に對する待遇について茲に一二言を述べたいと想ふ。私は呼び醒されてから五六年經つた。わが主なる耶蘇基督の必要と價値とが解るやうになつた。又彼のためにわが靈魂を的にすることが出來るやうになつた。そこで人生の判斷にも聖淨にも最も適才である二三の聖徒は、神が私をしてその神聖にして祝福ある言葉から聖意の幾分を悟るに足るものたらしめられたことを認めた。敎化の爲めに或る程度までわが見し所を他人に發表する力を私に賜つたことを認めた。それ故彼等は近く催される一つの集會で、私に一言の勸諭をなさんことを最も熱心に乞ふた。

そのため私は當惑もするし、赤面もした。それでも尙ほ所望し、懇請されるので、その要求に應じた。二回の內密な集會で、二度話しをした。そして自分

の才能はいかに力弱く瑕だらけであるかを發見した。それでも人々は大なる神の眼の前にある如く、感動し慰安せられたやうに見えたばかりか、眞面目にさう斷言した。そして恩寵を私に賜はれることに就て、仁惠の神に感謝した。

その後時々傳道のために國の內を廻る人があると、私にも一緒に行くやうにとのことであつた。併し私は自分の才能を公然用ひなかつた。又用ひやうとも しなかつた。唯內密に、諸方の善良な人民の中にゆく每に、時々勸諭の言葉を語るに過ぎなかつた。すると彼等はこれまでの人々のやうに、私に對する神の仁惠を悅んで受容れて、その靈魂を啓迪れたことを告白した。

それはさておき、遂に私は敎會の所望に依つて、嚴肅なる祈禱と斷食との後、特に召し出されて、定時公會の說敎を命ぜられた。それは信者ばかりでなく、未だ信仰を受容れない人々に福音を傳へるためであつた。その時私は進んでなせといふ秘密な衝動を判然と心の裡に見出した。神は祝福すべきかな。それは虛榮の願望で無かつた。その時私はわが永遠の狀態に關して、惡魔の猛烈な投槍に痛々しくも惱されてゐたからである。

けれども私は自分の才能を實用しないでは滿足が出來なかつた。私がそのため大に元氣づいてゐたのは、敬虔なる願望が絶えなかつたばかりでなく、保羅が哥林多人に告げた言葉に依るのであつた。曰く、「兄弟よ、ステパナの家は即ちアカヤの初めの果なり。又彼等が聖徒の奉仕に身を委ぬるは爾曹が知るところ也。われ勸む、爾曹も此の如き者および凡これと偕に勞むる者に服せよ」(コリント前十六、十六)

この聖句に依つて私は、聖靈が才能技倆を有する人々を決して地に埋もらしめないことを悟つた。寧ろその才能を實用するやうに命令したり鼓舞したりする。又それをなすに適當な準備をしてゐる者を推奬するのである。所謂彼等は「聖徒の奉仕に身を委ぬる」のである。この聖語は當時絶えずわが心に驅廻つて、神の事業をなすやうに私を勵まし力づけるのであつた。それから又聖書その他昔時の歴史に枚擧された種々なる聖語や敬虔なる實例に奬勵された。曰く、「ここに於て散されたる者共、徧ねく往きて、福音を宣傳へたり(使徒八四)。爰にアレキサンドリアに生れしユダヤ人にて辯才あり且つ聖書に達したるアポロと名づくる人エペソに來れり。この人夙くより主の道の教を受け、且つ心を熱くしてイエスのことを詳細に誨ふ(使徒十九、廿四、廿五)。神の樣々の仁惠を司どる善き家宰の如く、各人その受けし所の賜物を以て互ひに施すべし(ペテロ前四〇十)。されば賜る所の恩によりて各々その賜物を異にせり。或は預言あらば、信仰の量に循ひて預言をなし、或は役事あらばその役事をなし、或は教誨をなす者はその教誨をなし、勸諭をなす者はその勸諭をなすべし(ロマ十二〇六—八)

私自身は凡ての聖徒の中で最も價値のない者であるにも係はらず、それでも尙ほ戰々兢々としてわが柔弱を嘆ちながら働くのであつた。わが才能に從ひ、わが信仰の度合に從つて、神が私に聖き眞理の言葉を示したまへる祝福の福音を宣傳した。そのことが近在に傳はると、幾百人となく神の言葉を聽きに來た。諸方から種々樣々な理由で聽きに來るのであつた。

神に感謝す。神は彼等の靈魂に對して惻隱と哀憐の尺度を私に賜はつた。それに依つて私は尙一層大なる勉勵と熱心とを以て働かされた。神祝福したまはば、彼等の良心を保有し、又これを呼び醒すに足るほどの一つの聖言を見出さ

んとした。善き主はその僕の願望を重んぜられた。長く説教しない内に、最早感動する者もあつた。彼等の罪の大なることゝ、耶蘇基督の必要なることゝが解つて、大に心を惱ますに至つた。

けれども私は最初神が自分のやうな價値のない者を用ひて、人の心情に話しをなさらうなどとは信ずることが出來なかつた。併しかやうに感動した者は私を愛するのであつた。私に特別な尊敬を拂つた。彼等が私に依つて呼び醒されたことを秘しておいても、尙ほ彼等は神の聖徒の前にそれを告白したり、確言したりするのであつた。彼等は又私のために神を祝福するのであつた。(いかに私は價値なき者なるよ。又救拯の途を自分達に示せる神の器と私を見做すのであつた。

彼等はその言葉も行爲も一定して來た。その衷心に於て熱心に耶蘇基督の知らんことを求むるやうになつた。又神が彼等の居る所へ私を遣されたことを悅んでゐた。私はそれを見て、神が自分のやうな莫迦者をその事業に用ひたまふことを斷定するに至つた。そして神の言葉は來りてわが心情を爽快にした。曰く、「己びんとせし者の祝福われに來れり。われ又寡婦の心をして喜び歌はしめたり」(ヨブ廿九〇十三)。

茲に於て私は悅んだ。私の説教に依つて神が彼等の眼に浮べしめられた涙は、わが慰安となり奬勵となつた。それは次の言葉を想つたからである。曰く、「若しわれ爾をして憂へしめば、わが憂へしむる所の者のほかに誰か我を喜ばさんや」(後二〇二)。それから又、「われ他の人には使徒にあらずとも、爾曹には使徒なり。そは爾曹の主にあるは、わが使徒の職の印なればなり」(前九〇二)。これは神が私を呼んで、この事業に與はらしめられた他の論據のやうであつた。

神の言葉を説教するに就て、私が特に注意した一事がある。それは主が私を導いて、罪人に關する神の言葉を先づ第一に説しめたまふたことである。即ち凡ての肉欲を批難することである。又この世に生るゝ凡ての人は、罪の故に、律法に依つて神の呪詛を受けねばならぬことになつてゐる、その事を解明し又主張することである。私の此の方面の働きは充分なる功果を收めた。律法に對する恐怖や、自分の愆に對する罪は、私の良心に重く横はつた。私は感じた所

を説教した。心に強く感じた所を説教した。そのためにわが可憐なる靈魂は駭然として呻き慄へるのであつた。

實に私は陰府から彼等に遣はされた人のやうであつた。私は鎖に繋れて往つた。鎖に繋れて彼等に説教した。自分の良心に燃ゆる火があつたので、それを以て彼等に警告した。飾ることなく事實を言へば、私は説教する時、教壇の入口までは罪と恐怖とに胸一杯であつた。けれどもそれは其處に取去られた。そして説教を終るまでは心が自由であつた。けれども講壇の階段を下りぬ前にまたもや私は前のやうに惡くなつた。俳し神は確に強ひ手を持つて、私を左右されると見えて、罪も地獄もわが働きを妨げなかつた。

二年の間私は人々の罪とその慘然しき有様に對して叫んだ。その後主は基督に頼れる確固たる平和と安慰とを私の靈魂に與へられた。主は基督に頼れる種々なる祝福の恩寵を嬉しくも自分に發見することを許された。それ故私の説教は改まつた。見る所、感ずるところを話すやうになつた。今や私は耶蘇基督のこの世における職分と關係と恩澤とを顯はすことを大に努めた。又この世が虚偽

なる杖や柱に倚つて、遂には倒れて滅びんとすることを發見し、これを批難し、これを移さんと努めた。私は後者に對して前者と同じく永く心を用ひた。

その後神は基督と配合する奥義に私を導かれた。私は發見せる所を又彼等に示した。私は五年の間、いやそれ以上も神の言葉の主なる此の三點を説くために旅行した。然るに私はその事のために捕はれて牢獄に投込れた。そして永く獄中に起臥した。それまでは説教に依つて、聖書の眞理を證明してゐたのであつたが、これからは苦痛に依つて眞理を確證するに至つた。

私が説教してゐた時、屢々禮拜の始めより終りまで、聖言をして靈魂の救拯に効能あらしめたまはらんことを衷心の大なる熱情を以て神に叫んだことを感謝する。惡魔は聖言を良心から取去つて、これを果實しめざらんとした。私はそれを氣遣つて憂に沈んだこともある。故に私は聖言を語るに當りて、出來るだけ、罪と罪ある人のことを詳しく説くやうに努めた。

禮拜の説教をなしてゐる時に、今聖言が礫地に雨の如く落ちてゐるといふ考が私の心情に入つて來た。それでも私の衷心に願ふ所は、今日私の話を聽いて

ある人々をして、自分と同じやうに罪と死と地獄と神の呪咀とは何であるかを悟つてもらひたいことであつた。又基督を通して、神の恩寵と愛と仁惠とが、彼等の如く神から遠ざかれる人々に與へらるゝを悟つてもらひたいことであつた。實際私は屢々心の中で、神の前に恁う言つた。「現在彼等の眼の前で絞殺されることが、彼等を呼び醒して、眞理を彼等に確める手段になるならば、私は悅んでそれをお受けする。」

私は說敎に於て、特に、基督によれる生命は功績なしに獲られるといふ敎理を說いてゐた。その時神の使者が私を奬勵せんために自分の背後に立つてゐるやうに感じた。あゝ、神の使者はかくして私がこれを解明し、證明して、人々の良心にこれを結び着くる力と天來の證據とをわが靈魂に與ふるのであつた。私は「われその確實なることを信ず」といふを以て滿足しなかつた。(若し自分の言ひ方が正當なりとすれば)、私の主張する所は確實といはんよりは眞實であると言ひたかつた。

私が最初聖言を人々に說敎するやうになると、國內の學者や僧侶は公然私に反抗した。けれども私は嘲笑に應へるに嘲笑を以てせざるやうに戒められた。そして私は此の世の敎師達の多數がいかに律法に依つて悲慘なる有樣にあるかを信ぜしめられた。それと同時に益々基督の必要と價値とを信ずるやうになつた。「彼等の面前にてわが備値を調ぶるその時來らば、これはわれに代りて答をなすべし」(創世三十三)と想つたからである。

私は聖徒の中に論爭される事などには、殊に最も低いつまらぬ事などには決して與らうとしなかつた。けれども信仰の聖言とか耶蘇の死と苦惱とに依つて罪の赦されるとなどに對しては非常な熱心を以て悅んで爭論した。その他の事に關しては、聖徒の中に喧嘩があるのを見ても、その成行に任せた。その喧嘩がいかに落着しても、我々を推奬して神の有たらしめはしない。それのみならず、私の働きは、彼等と全く別な溝を流れて、人を呼び醒す言葉を運ぶのであつた。故に私はそれに執着した。

私は決して他人の境界(ロマ十五十八)を侵して、それを用ひやうとしなかつた。(併し他人がそれを爲すことを咎めはしない)。そは聖言と基督の靈とに依つて私に

教へらるゝ所は、最も健全にして最も善く確立せられた良心に依つて、語ることも、保つことも、固守することも出來るものなることを心に想ひ、又これを身に經驗したからである。此の事に就て今私の知つてゐる所を凡て茲に語ることを好まぬ。併し私は多くの人が注意する以上に、加拉太書一〇十一、十二の聖語に多大なる興味を經驗した。

私の傳道に依つて呼び醒された者の中、その人數が餘り多かつた。彼等を失つた悲嘆が墓に往つたやうであつた。わが靈魂の救ひを失ふ恐怖は別として、いかなる悲嘆もそれに比ぶるものなきことは、主の答なしに言ふことの出來ることである。私は自分の子供が生れたところのその場所に立派な建物と所有權とを持つてゐるやうに心得た。私の心情はこの卓越せる働きの光榮に奪はれた。神が私を基督教界の皇帝となし、又地上の榮華の主となされたよりも、自らこれを神の最大なる祝福であり名譽であるやうに心得た。曰く、「罪人をその迷へる道より引戻すは、乃ちその靈魂を死より救ひ、且つ多くの罪を掩ふことを」(ヤコブ五〇廿)。「義人の果は生命の樹なり。知慧ある者は人を捕ふ」。(箴言一〇廿十)。「慧き者は空の光輝の如くに輝かん。また多くの人を義きに導ける者は星の如くなりて永遠に至らん」(ダニエル二〇三十)。我等の希望、また歡喜、また誇榮の冠は誰ぞや。我等の主耶蘇基督の臨らん時、その前にて爾曹もこのものとなるにあらずや。それ我等の榮光と歡喜とは爾曹なり」(テサロニケ前二〇十九、廿)。これらと一樣な多くの言葉は私にとりて大なる清涼劑であつた。

神のために働きをなすに當りて、私は先づ第一に謂はゞ、說教の出來るやうに神がわが靈に來りたまへるや否やを觀察した。又人々の靈魂が別々に私の心情におかれた。私はその救はれんことを願ふやうに鼓舞された。斯る人々の靈魂はその後わが傳道の果實として與へられた。內に投込れた一言が側に落ちた凡ての言葉よりも徐ろに說教の効果として現はれ來ることを觀察した。折々自分が何も善い事を仕なかつたと想ふ時こそ、最上なることをしてゐるのであつた。又彼等を捕えやうと想つた時には、何をも漁せぬのであつた。

私は又罪人を救はうとすると必ずそこに惡魔が神の僕の心情や口に依つて哮

り出すことを觀察した。それから又屢々この世に惡の最も荒狂ふ時に、人々の靈魂が聖言に依つて呼び醒されるものであることを觀察した。茲に種々例證を擧ぐることも出來るが、割愛する。

わが傳道の任務を果すに當りて、私の大に願望する所は、國中の最も暗黑なる場所に行つて、職業を持たぬ人民の中に入込むことであつた。それは私が光に堪へない故ではない(私は誰にでも福音を說くことを恐れなかつた)。却つてわが靈は警醒し回心せしむる働きに最も偏つて行つたからである。私が身に運んだ聖言は最もその方に傾いたからである。曰く、「且つわれ愼みて他人の置きし土臺に建てじと、耶蘇の名の未だ稱へられざる所に福音を宣傳へたり」(ロマ十五〇廿)。

私は說敎するのに實に苦しんだものである。謂はゞ神の子供を生むために苦しんだ。私は自分の働きに果實の現はれぬ中は滿足することが出來なかつた。果を結ばぬならば、誰に讃められても有難くなかつた。けれども果を結ぶならば、誰に批難されても苦しくなかつた。私は次の語を想つた。曰く、「視よ、子等はエホバのあたへたまふ嗣業にして、胎の實はその報の賜物なり。年若き頃ほひの子は、丈夫の手にある矢のごとし。矢のみちたる箙を持つ人は幸ひなり。彼等門にありて仇どものいふ時、耻ることあらじ」(詩百廿七〇三—五)。

人々がいかに種々な說を飲込むのを見ても、耶蘇基督を知らず、おのが救拯の價値を知らざるならば、毫も私を樂しますに足りなかつた。おのが罪、殊におのが不信仰を充分に悟つて、誠に聖化された靈魂を持たんために、基督に依つて救はれたいと强く憧れて、火と燃ゆるやうな心情こそ、私を樂しますものであつた。これこそ祝福せられたりと思ふ靈魂であつた。

けれども傳道事業に於ても他の事と同じく、誘惑が私に伴ふのであつた。然もその誘惑は種々なる種類のものであつた。時には自分が敎化に對して一言も口を利くに足らぬことを怖れて、大なる失望に襲はれたこともあつた。否、私は人民に意見を語るに足らぬものと思つた。かやうに不思議にも心が弱つて力脫けがすると、それが身體にも影響して、禮拜の場所に足を運ぶことさへ出來ぬほどであつた。

又時には說敎してゐる間に、激しく不敬の念に襲はれたこともあつた。會衆

の前に不敬の語を口にせんとするまで強く誘惑された。又時には聖言を語るに當つて、始めは事理明晰例證的確で、自由に話すことが出來たが、それを終る頃になると、話してゐる事柄が眼に見えなくなつて、それに遠かつてしまふこともあつた。又人民の前に語りながら、知つてゐない事や、記憶してゐないことでも口にするやうに、自分の演說が滑つてしまふこともあつた。それから自分の頭腦が禮拜中に袋を被されてしまつたやうになることもあつた。

又時には激越な肉薄するやうな聖言について說教することでもあると、誘惑者は暗示して言つた。卿は「どうして、これを說教するのか。これは卿自身を批難する語である。これに依ると卿自身の靈魂は有罪である。故にこれを說教するのは全然止めたが可い。若し說教するなら、それを柔げて、自分の遁れる途だけは作つておきなさい。他人を呼び醒さうとして、その代りに、自分が脫することの出來ない罪に卿の靈魂を落したところが仕方がなからう。」

主に感謝す。私はこの懼るべき暗示に同意しなかつた。寧ろサムソンの如く、力を極めて身を屈め、罪と愆とを何處に見出しても、これを批難した。然り、私は又そのために自分の良心をも罪あるものにした。神の祝福の聖言を不正に取扱はんよりは、「異邦人と共に死せしめよ」(士師十六、廿九)である。他人を教ふる者、いかで自己を教へざるや。けれども他人のため有體に說教して、自分も審判ることは、唯自分だけを救ふて、義の眞理を幽閉するよりも勝つてゐる。これに就ても力を添へたまふ神は祝福すべきかな。

基督の此の祝福ある事業をなしてゐる間にも、私は又屢々心の傲と高ぶりとに誘惑された。(トップレディの著書に次の逸話が記してある。ジョン・バンヤンは或日特別に溫情と快濶とを以て說教した。二三の友人は禮拜後その手を握つて、大變佳い說教であつたと稱賛した。バンヤンは言つた。「そんな事を言つて下さるな。教壇を下りる前に惡魔もさう言ひました」)。私はそれに依つて心を動かされないではなかつた。併し尊とき仁惠の主は斯る事に對して私に唯僅かの歡喜を持たされたに過ぎなかつた。私は日課のやうに自分の心情の惡い所を見せつけられた。そこには未だ澤山な敗德と弱點とがあつた。それは私の才能と練達との下に首を垂れてゐた。私は肉體に於てこの刺を感じた。「また賜はりし數多の默示によりて我が傲ぶることなからんために一つの刺をわが肉體に與ふ。即ちわが傲ることなからんために我を擊つサタンの使者なり。我これが爲めに三

次主にこれを我より離んことを求めたり（コリント前十二、二〇七、八）。この語は私にとりて神の仁恵に他ならなかつた。

又それと同時に或る有名なる聖言が私に示された。その言葉は才能や技倆があつても、霊魂は滅ぶるといふ、鋭い刺通するやうな文意を有するのであつた。曰く、「假令われ諸の人の言葉および天使の言葉を語るとも、若し愛なくば鳴る銅や響く鉞の如し。假令われ預言する能あり、又凡ての奥義と凡ての學術に達し、又山を移すほどなる凡ての信仰ありと雖も、若し愛なくば數るに足らぬものなり」（コリント前十三、一）。

響く鉞は老練なる音樂者が諧調にして心火を燃す樂の音を出すことの出來る樂器である。その音を聞く者は皆思はず踊り出すのである。又見よ。鉞には生命がない。樂の音はそれから生ずるのではない。唯それを演奏する人の技能に依るのである。過し時には美音を發した樂器も遂には廢滅するに至るのである。

才能ある人にして救ひの恩寵を缺く時には、矢張さうである。又今後もさうであらう。彼等は基督の手にあること、ダビデの手にある鉞のやうである。ダビデは鉞を以て神の祭儀を樂しました。禮拜者の心情を高めた。その如く基督は才能ある人々を用ひて、その教會の人民の霊魂を感動せしめられる。けれども彼はそれを成し了ると、響く鉞の如く生命なき者として彼等を廢物にされるのである。

斯る思慮は他の理由と共に傲慢なる頭や虚榮の願望に對して重い槌のやうであつた。自分が鳴銅であつても、どうして自慢することが出來やう。然らば提琴ならば如何。假令小さな生物でも生命を有する者はそれらの物よりも神に近しくはないか。それのみならず、決して死せざるものは愛である。これらの物は廢れて消ゆるのである。故に私は少しの恩寵や、少しの愛や少しでも眞實に神を畏れることは、凡ての才能よりも一層善きことを斷定した。然り、私の充分信ずる所によれば、この事はその方法を人に問はれても、答が出來ないで大に當惑するやうな人々に起り易いのである。斯る人々は知識を賜つたので、自分を天使のやうに見せかけることが出來る者よりも、數知れぬほど一層の恩寵を受け、又主の愛と恩澤とに一層多く與ることが出來るのである。

それ故に才能そのものは他人の教化に使用するために善きものではあるが、それを單獨に離して見れば、空しいものである。又それを有する人の靈魂を救ふ力のないものであることを認めた。いろ〳〵な才能は人が幸福なる有樣にある標章ではない。神はそれを或る人々に分ち與へて、それに依つて彼等の改善をなさしめられる。されば束の間の生命の過ぎ去る時、その改善せるとせざるとは、生ける者死せる者を審かんとしたまふ神の參考になるのである。

才能は單獨に危險ではない。唯それに伴ふ所の惡のために危險であることは、これに依つて又私に示された。即ち傲慢、虛榮に對する願望、自負等は思慮の定まらぬ基督者に稱賛され稱美され易いものである。併しそれは可憐なる者を、して惡魔の批難に陷らしむる危險がある。

それ故に才能を有する人は、その才能の性質を吟味して、其れに依つて直ちに眞實の救ひの境遇に自分を置くやうにせねばならぬ。若し然らずしてその才能に安んずれば、神の恩寵に與ることが出來ぬのである。

才能を有する人は謙遜して神と偕に歩まねばならぬ。自分の眼におのれが小さく見えねばならぬ。それと同時にその才能は自分のものでなく、教會のものであることを記憶せねばならぬ。その才能に依つて彼は教會の僕となされるのである。彼は又遂に主耶蘇にその執事としての報告を與へねばならぬ。善き報告を與ふることは祝福ある事である。

それ故凡ての人々をして主を畏るゝ心を以て自分の評價を尠なからしめよ。才能は實際願はしいものである。けれども大なる恩寵と少なき才能とは大なる才能と恩寵のないことよりも一層善いことである。主は才能と榮光とを與へたまふことは言へない。主は恩寵と榮光とを與へたまふのである。主が恩寵即ち眞正の恩寵を與へたまふ人は幸なるかな。その恩寵は確に榮光の先驅である。

惡魔は私に對する斯る誘惑と攻擊とがその計畫に添はぬことを看破した。即ち傳道を妨碍し、結局それを無効にすることが出來ぬのである。そこで彼は又他の方法を講じた。それは無學者や惡者の心を煽動して、讒謗と批難とを私に積み層ねることであつた。惡魔は有ゆる工夫、有ゆる道具を用ひて、私に對して國内の人心を攪亂した。その手段に依つて世人をして私の傳道を見棄てしめん

としたのである。

それ故私が魔法使である。ジェス井ットである。剽盗であるといふやうなことを、世人から風評されるに至つた。

斯る風評に對して、唯言ふべきことは、神が私の無罪を知りたまふといふ事である。けれども私の罪を鳴す人々よ。私が衷心に祈る所は、神が卿等を悔改めしめたまふことである。然らざれば卿等は神の子の法廷の前で私に對坐せる時、「其他の不義と一緒に」この事に對して答辯せんがために用意せよ。

一番途方もない評判は、私が情婦や娼婦や私生兒を有するといふことであつた。一度に二人の妻を有するといふやうなことである。讒謗、愚かなる不正の虚言、虚僞は惡魔と其の輩とに依つて私に投付けられたのである。私がかやうに世の中から惡い取扱ひを受けなかつたら聖徒たり神の子たる一つの印を缺いたであらう。主耶蘇言ひたまふ。「我がために人なんぢらを誚しり、迫害いつはりて樣々の惡しき言をいはん。その時は爾曹幸ひなり。喜び樂しめ天に於て爾曹の報償おほければ也。」そは爾曹より前の預

言者をも斯くせめたりき（十、十一五〇）。

それ故に斯る事は自分一個の上より言へば、尠しも苦しくなかつた。それ以上二十倍も讒謗されても何んでもない。私の良心は確然であつた。私が惡いことをする者のやうに惡口を言ふことは、取も直さず私と基督との對談を不正にも咎め立てすることなどで、彼等にとりていかにも耻しいことであつた。

かやうに自分を讒謗した人達に對して何を言ふべきであらう。彼等を脅迫すべきか。彼等を叱咤すべきか。彼等に阿ねるべきか。彼等の舌を動かさぬやうに懇願すべきか。否、私は斯ることをせぬ。そんな虚僞を作つたり、人を煽動したりする人達が斯る事のために永罪に當るやうなことがないならば、私は彼等に向つて、「いくらでも評判せよ」と言ひたい。わが名譽はそれに依つて增すからである。

故に私は斯る虚言や讒謗を身の裝飾にした。譏られ、讒せられ、詬られ、憎まれることは、基督者として私の職務の内である。わが神、わが良心の證人たる以上、斯る事は何でもない。故に私は基督のために誘られることを歡ぶのである。

私は彼等を莫迦者と呼び惡者と呼ぶ。彼等は前述の通り、私が婦人とどうとかしたといふやうなことを確むるのをその仕事の一部と心得てゐたからである。彼等は一生懸命になつて、天か地か地獄かに、何時か何處かで、晝間か夜間か私と關係したことのある婦人を見つけ出すために、詮議に詮議を屑ぬるのであつた。斯く申すのは、わが敵に對して、私を重んぜよと乞ふためであるか。否、斷じて然らず。私はこれに就て誰にも自分を信ずることを乞はぬ。これに就て、私を信ぜよ、又信ずる勿れ。何れにしても我關せずである。

わが敵は私を射撃する的を誤つた。私はそんな者ではない。斯ることをいふ人こそ無罪であれかしである。英國における私通者や姦淫者が絞殺されるものとせば、彼等が猜疑の的であるジョン・バンヤンは尙ほ生きて健かであるべきである。蒼穹の下に、わが妻の外、私と關係ありし女の生存せるを知らぬのである。

神の知慧は稱讃すべきかな。神はわが最初の回心以來今に至るまで私をして婦人を敬遠せしめられたのである。私に最も親しい關係ある人々は目擊したであらうが、私は婦人に對して樂しさうに振舞つたことは極めて稀れであつた。婦人に對する普通の挨拶も私は嫌つた。誰かにそんな所を見られるのも忌であつた。婦人と一緒に歩くことも避けた。婦人の手に觸ることも稀であつた。さういふ事は私に似合はしくないことだと思つた。性の善い人々が婦人を訪問したり、婦人に訪問されたりするのを見ると、私はそれに抗議した。それは唯一片の禮儀であると答へられても、私はそれがあまり見つとも無いことではないかと言つた。或は聖なる接吻を奬勵する者もあつた。私はそれに對して何故人の選好みをするかと尋ねた。最も立派な人々には接吻して、顏の醜い者にはそれをせぬのはどうしたのかと尋ねた。かやうに他人の眼に稱贊すべく見える事でも、私には不體裁に見ゆるのであつた。

畢竟するに私はわが妻のほか他の婦人と肉の罪を犯さなかつた。それを證するために人々を喚ぶのみならず、天の使者をも呼んでも可い。幾度でも證人を呼ぶことを畏れぬ。斯る事について私が無罪であることを證するためには、わが靈魂の證人として主を呼んでも差支へないであらう。私は何も他人以上に善い事

をしたので、斯の事をせぬやうに保護されてゐるのではない。神の仁恵に依つて、私は保護されてゐるのである。私は神に對して唯この事のみならず、あらゆる惡事惡行から私を保護して、天の王國に私を貯へたまへと祈るのである。アーメン。

惡魔は罵詈讒謗に依つて私をわが國人の中に憎まれ者にした。そして出來るならば、わが說敎を無効ならしめんとしたのである。斯して長い忌しき入牢となつたわけである。それに依つて私は基督に對するわが勤行を想へば慨かざるを得なかつた。世人も駭然とした。私の說敎を聽くことを畏れた。これに就て私は次にその簡畧なる仕末を讀者に與へやうと思ふ。

四　バンヤンの逮捕と審問

（一）一六六〇年十二月わが入牢の顚末

わが神の攝理に依つて、私は五六年の間、何んの礙もなく、自由にわが主耶蘇基督の祝福の福音を宣傳することが出來た。又その祝福の恩寵に依つて心を勵された。然るに人の救拯の仇敵である惡魔は機に乘じて私に對してその臣下の情を燃さした。そのため遂に私は一人の判事の令狀を差しつけられて、捕はれて、牢舍に入れられた。その顚末は次のやうである。

一千六百六十年十一月十二日、私はベットフォード郡のハアリングトンのサムセルで說敎するやうに、その土地の友人達から招かれた。私は主が許したまはゞ、その知らされた時刻に彼等と偕にあることを約束した。それを聽いた判事（その名をフランシス・ウィンゲート氏といつた）は直ちに私を捕えてその面前に曳くやうに令狀を發した。それと同時に集會を開く家を嚴重に看守させた。恰か

も我々がそこに集つて、國家を破壞せんとする畏ろしき陰謀でも企てでもするやうに思はれたらしい。警官が來た時、我々は手に聖書を持つて、神の言葉を語り又聽うとしてゐた。我々は恰度禮拜を始めんとしてゐた。祈禱の中に、かくも我々が寄り集ふ機會を與へたまひしことを神に感謝した。そしてそこに出席せる人々に主の言葉を說敎せんとしてゐた。（彼がこの時說敎せる聖書の引照はヨハネ九〇卅五「爾曾神の子を信ずるやい」であつた。）然るに警官が入つて來てそれを差止めた。私は捕はれて、その室を退却するやうに餘儀なくされた。若し私が卑怯な振舞をするつもりであつたら、警官の手を逃れて無事であることも出來た。それは私が友人の家に來ると、今日令狀を發して、私を捕えるといふ風評があつたからである。私の友人はそれを聽いた。彼は尠し小膽なので、集會をしても善からうかと尋ねた。そして私にこゝを立退く方が善くはないかと言つた。さもないと彼等は私を捕えて判事の前に曳き出し、それから入牢をさせるに相違ないと言つた。彼は彼等の側に住んでゐたので、彼等がどんな心持でゐるか、私よりも能く知つてゐた。私は彼に言つた。

「否、どんな事があつても、私は止めない。そのために集會を見合はすなどとは以ての外だ。まあ、安心してゐなさい。畏縮なくつても可い。私共のすることは善い事だ。そのために耻づる必要はない。神の言葉を說敎するのは善い事だから、それや、これやで、苦しむなら必ず善い報がある。」

けれども友人は自分のことよりも私のことを一層心配するのであつた。それから私は狹い巷路を歩きながら、やゝ眞面目にこの事を想ひめぐらした。するとわが心に浮んで來たことは、說敎するには誠心を以て勇ましくせねばならぬといふことであつた。又恩寵を感謝しながら、他人を奬勵することを自分の職務となすべきことであつた。それ故私が若し今逃ると、國內に甚だ惡い評判が立つに相違ないと想つた。氣の弱い新に回心したわが兄弟はそれを何んと想ふであらうか。私が口では强いことを言つたが、行爲では强くないと思ふであらう。それに今私が逃亡しても、令狀が發せられたのを見て、そこに出席する人人は其脅喝を聽いて恐縮してしまひはせぬかと心配した。それのみならず仁惠の神は私を選拔して此國の決死隊となされるつもりであると想つた。即ち福音

のために反對を受ける先鋒となされることである。私が逃亡すると、後に續く全軍を失望せしむるのである。それから又私は自分の卑怯のために、世人に福音を誹謗する機會を與へるのである。私が當然評價せらるゝよりも、自分に對し又自分の使命に對して一層惡い疑を挾む餘地を與へるのである。これらの事を熟考してから、私は集會を催すことを充分に決心して、再びその家に入つた。

警官が私を逮捕するまで一時間も閑があつたのである。けれども私は逃亡しなかつた。逃亡しやうと思へば出來たのである。けれども私は逃亡しなかつた。彼等が自分に對して言ふと爲すことを極度まで見やうと決心した。主は祝福すべきかな。私は自分の言つたこと、行つたことについていかなる惡をも認めなかつた。そこで前述の如く、集會を初めた。けれども警官が私を捕えるために令狀を持つて入つて來たのに礙げられて、集會を進行することが出來なかつた。併し私は立ち去る前に人々に對して數言勸告したり奬勵したりした。御覽の如く、神の言葉を話しもし、聽きもする機會を妨げられてしまつた。又斯る事のために苦しむのは好ましいことであると言つた。善き事のために苦しむのは仁惠である故に、落膽してはならぬ

と彼等を勵ました。我々は盜賊殺人その他の惡事のために捕縛せられたとしても止むを得ない。けれども神は祝福すべきかな。實際さうではない。我々は基督者として善き事のために苦しむのである。迫害者たらんよりは、迫害せらるる者たれと言つた。けれども警官と判事の部下とは待つてゐた。私を拘引するまでは安心しないので、我々は家を出た。然るにその日判事は家に居らなかつた。私の友人は明朝私を連れて警官の許に往くからと言つて、交渉してくれたさもないと警官は私を看守するか、その他の方法で私を護らねばならなかつた私の罪惡はそれほど重大であつた。明朝我々は警官の許に往つて、それから判事（ウィントン氏）の許へ往つた。判事は警官に向つて我々の行爲、集會せる場所、又所持品を尋ねた。それは我々が甲冑を持つてゐるか否かといふ意味らしい。警官は彼に答へた。唯數人の者が教を語り又聽くために集つてゐたのみで、その他の形跡は何も言ふべきことがないと。それでも判事は私を拘引したので、尙二三の尋問を試みた。その要點は即ち、私がそこで何をしてゐたか。又私が自分の職業に從事することを以て何故滿足してをらぬか。私の行つたやうなこと

を許しておくのは、法律に違反すると言つた。

ジョン・バンヤン。それに就て私は答へた。「私が茲に來たり、又他の所に往つたりする目的は敎へるためである。悲慘にも人々を滅びに至らしめざるために、その罪を棄てゝ、基督に和合するやうに忠告するためである。職業に從事することゝ、聖言を說敎することゝ、この兩者は混同しないで爲すことが出來る。」

この答に判事は怒れる色を示した。彼は我々の集會を絕對に差止めると言つた。

バン。「それも止むを得ませぬ」と私は言つた。やがて彼は「私を監視する保證人を作らねばならぬ。さもなければ私を牢獄に投ずるほかない」と言つた。

私の保證人は出來たので、彼等を呼び入れた。私の眼の前で保釋書は作られた。その時判事は彼等に向つて、私が說敎させぬやうに監視せねばならぬと言つた。私が說敎すると、彼等の保釋金は沒收せられることになる。それに對して私は答へた。自分はその束縛を破らねばならぬ。神の言葉を語らないで居ることは自分には出來ない。私が茲に來たのはこの人民を誡め、慰め、諫め、敎へるためである。それは尠しも害にならぬ事で、譴責されるよりも寧ろ稱贊される値があると想ふ。

ウインゲート。そこで彼は私に言つた。「保證人に監視が出來ないとすると、私の收監狀を作らねばならぬ。そして私を四季開廷裁判まで入牢申付ける」と。

私の收監狀は作製された。判事は引取つた。そこへ眞理の仇敵であるリンデル博士が入つて來た。彼は入つて來るや否や、罵詈の語を浴せかつた。

バン。彼に對して私は答へた。「私が茲に來たのは、彼と語るためでなく、判事と語るためである」と。

そこで彼は私が何にも言ふことがないのだと想像して、勝利を獲たやうに勝ち誇つた。そして私が何等の免狀をも受けてゐない事に携はるのは善くないことだと言つて攻擊批難した。彼は私に宣誓したかと尋ねた。若しせぬならば、氣の毒ながら入牢せねばならぬと言つた。

私は彼に對して、それ程私のことが氣にかゝるならば、いかなる眞面目な問題を出されても、それに答辯しませうと言つた。そこで勝利の確信を持てる彼

は、私が説教して差支へないといふことをどうして證據立られるかと言つて、私に迫つた。

遂に私はそれに答へやうと思へば出來ることを彼に示すために、彼得書の一節「各々その受けし所の賜物を以て互ひに施すべし」(書四〇十前)といふ句を引照した。

リンド。「然り、それは誰に語られたか」と彼は言つた。

バン。私は言つた。「誰にと言つて、神から賜物を受けた各々である。使徒は『神から賜物を受けし各々』と注意して、又『爾曹一人々々預言するを得べし』と言つてゐる。」

そこで此人は暫く默つて、少し柔しくなつた。それでも勝利を失つてはならぬと思つたか、又口を開いた。

リンド。「成程私は銅匠のアレキサンダアといふ者の事を讀んだことがある。その男は大變反對なことをして、使徒に迷惑をかけたさうだ。」(私が鑄物師なので、かやうに當擦を言つた)。

バン。それに對して私は答へた。「私は又多くの祭司やパリサイ人がわが主耶蘇基督の血をその手に染めたことを讀んだ。」

リンド。「然り」と彼は言つた。「卿は學者やパリサイ人の一人である。卿は口實を以て寡婦の家を呑んために長き祈をなす者である。」

バン。私は答へた。「私よりも卿の方が說教や祈禱から多くの所得をうるのであらう。さもなくば卿は今のやうに富有になれはしない」と。然るに「愚かなる者の愚かに從つて答ふる勿れ」といふ聖語が心に浮んで來たので、私は眞理を傷つけない限り、出來るだけ自分の言葉を節約した。

恰度その時、收監狀が出來上つたので、私はベッドフォードの牢獄に送らるるために、警官に渡された。

然るに私が送致されると、二人の兄弟が途中で待受けて、警官に足を停むることを乞ふた。彼等は判事と懇親である所から、これを說き伏せて、私を放免させやうとするのであつた。我等がそこに足を停むる間に、彼等は判事の許に往つた。そして彼と大に議論してから、かういふことになつた。私が再び彼の許に行つて、確かなる言葉を口にするならば釋してやるといふのである。彼等

がそのことを私に話した時、私の言はねばならぬ言葉が良心に訴へて言ふとの出來るやうなものであるならば、差支へないが、さもなければお斷りすると言つた。併し彼等が強いて求むるので、また後戻はしたが、放免されやうとは信じなかつた。彼等が私を釋さしめやうとする精神には眞理に反對した考慮が充ち滿ちてゐて、稍ともすれば、わが神を蔑し、わが良心を傷つけんとすることを怖れた。故に私は途すがら、わが心情を以て神を仰ぎ望み、光と力とに護られて、神を蔑し、わが靈魂を害ひ、又主耶蘇基督に近づかんとする人々を悲しましめ失望せしむるやうな事をなさしめたまはざることを祈つた。

私が再び判事の許に往くと、ベッドフォードのフォスタァ氏が別室から現はれて、蠟燭の光で私を見た。(そこへ往つた時は暗ひ夜であつた)。彼は私に向つて、「そこにをられるのは何誰か。ジョン・バンヤンでしたか」とさも親しげに、私の頸に飛びついて接吻(ユダのごとし)でも仕かねない樣子であつた。神の道の熱心な反對者であつたといふほか尠しも知らない人がさも愛に滿ちてゐるやうに私を待遇するので、聊か面喰つた。然るにその後彼がなせる所を見て、私は「彼等の舌は油より滑かなれども、その言葉は拔ける劍の如し」とか、「人々に用心せよ」とかいふ言葉を思ひ出した。私は神の祝福に依つて達者であると答へた。すると彼は「どうして茲へ、何のために?」と聽いた。私は彼に答へた。「私は程遠からぬ所の集會で、人民に勸諭の言葉を語らうとしてゐると、判事がそのことを聽いて私を拘引するために令狀を發したのです。」

フォスト。彼は言つた。「それで解つた。若しも卿が最早人民を召集しないやうに約束するならば、家に歸る自由を得ることが出來る。わが兄弟は卿が唯柔順でありさへすれば、卿を牢獄にやることを大變嫌つてゐる。」

バン。私は言つた。「足下、人民を召集するといふのはどういふ意味でありますか。私の爲す事は唯彼等が集ると、その靈魂が救はれるかどうか反省せよと諫めるだけであります。そのほか彼等の間に何もしたことはありませぬ。」

フォスト。彼は言つた。「我々は今辨明や議論をする必要はない。唯卿が最早人民を召集せぬと言へば、自由が得られるのである。さもなくば、牢獄に送られねばならない。」

バン。私は言つた。「足下。私は誰にでも自分に聽くことを無理強いをせぬつもりである。けれども何處にでも人民が一緒に集つてゐる所へ行けば、自分の才能と智慧とで出來るだけ、その靈魂の救はるゝために、主耶蘇基督に乞ひ求むるやうに彼等を戒しめ諭さうと想ふ。」

フオスト。彼は言つた。「それは卿の仕事ではあるまい。卿は自分の職業に從事せねばならぬ。說敎を廢して、職業に從事さへすれば、判事の好意で、直ちに放免されるのである。」

バン。私は彼に言つた。「私は自分の職業に從事し、又聖言を說敎することも出來るのであります。機會がありさへすれば、この二つをなすのは私の義務であるやうに思ひます。」

フオスト。彼は言つた。「斯る集會をなすことは法律違反である。故にそれを卿に止めさせたい。最早人民を召集しないと言つてもらひたい。」

バン。私は彼に言つた。「私はこれ以上の約束は出來ませぬ。私の良心はそれをなすに忍びないのであります。それから又私は自分の職業ばかりでなく、何

處にでも行つて聖言について自分が持つてゐる最上の知識を凡ての人民に告げて、出來るだけ善い事をするのを自分の義務だと思つてゐます。」

フオスト。彼は私に言つた。「卿は羅馬敎徒に最も近い人である。直ちにさう論斷しても差支へない。」

バン。私は彼に尋ねた。「甚麼してです？」

フオスト。彼は言つた。「卿等は聖書を文字通りに解釋するからである。」

バン。私は彼に言つた。「文字通りに解釋すべき所は、さう解釋するし、他の意味に解釋すべき所は、さう解釋するやうに努めてをります。」

フオスト。彼は言つた。「聖書の何れを文字通りに解釋するか。」

バン。私は言つた。「信ずる者は救はるべしとの語がある。これは言はれた通りに解釋すべきである。誰でも基督を信ずる者は、聖書の明白な單純な言葉に從へば、救はれるといふのである。」

フオスト。彼は言つた。「卿は無學である。聖書が解らぬのである。卿は希臘の原語を知らないで、どうして聖書が解るか。」

バン。私は彼に言つた。「御意見のやうに、希臘の原語を知る者のほか、聖書が解らないといふならば、極めて少數の人だけが救はれることになる。それは苛刻である。聖書にも、『神はこの事を賢者達者に隠して、(即ち世の學者に)、赤子乳呑兒に顯したまふ』と言つてある。」

フオスト。彼は言つた。「卿に聽く者は愚かな人民の仲間だけである。」

バン。私は彼に言つた。「私に聽く者の中には賢い者も愚かな者もあります。又最も普通に世の中から愚かのやうに想はれてゐる者は、神の前に最も賢い人であります。又神は賢き者、力ある者、貴き者を拒けて、愚かなる者、賤しき者を選びたまうのであります。」

フオスト。彼は私に言つた。「卿は人民をして職業を忽そかにさせる。神は六日働いて、七日目に神に使へるやうに命令された。」

バン。私は彼に言つた。「富めるも貧しきも、肉體と同じく、日常その靈魂のために氣をつけべきは人民の義務であります。神はその人民が今日と呼ぶその日の間に、毎日互に訓戒するやうに欲せられるのであります。」

フオスト。彼はまた言つた。「卿に聽くために來る者は貧しい單純な無學な人民の仲間だけである。」

バン。私は彼に言つた。「愚かなる者、無學なる者は、教訓と教示とが最も必要であります。故にその働きをなすことは私にとりて有益なことであります。」

フオスト。彼は言つた。「要するに卿は最早人民を召集せぬことを約束するであらうか。然らば放免されて、家に歸れるのである。」

バン。私は彼に言つた。「今まで言つた以上のことを申すことは出來ませぬ。私は神から言ひつけられた働きを止めると言ふことが出來ませぬ。」

茲に於て彼は私から離れた。やがて判事の僕達が數人やつて來て、「あまり頑固ではないか」と言つた。その主人は私を釋したく思つてゐる。若しも私が最早人民を召集せぬと言ひさへすれば、自由の身になれるのだと言つた。

バン。私は彼等に言つた。「一人の者が人民を召集すると言ふことには、種々な方法があります。例へば、一個の人が市場に坐つて、書物か何か讀んでゐます。人民に向つて、諸君、茲へ來て聽きたまへとは言ひませぬ。併し彼等は彼

が讀書してゐるといふことに依つてその側にやつて來る。それでも彼等を召集したと言ふことが出來る。彼がそこで書物を讀んでゐなければ、彼等はそれを聽くために來ないからであります。そんな事も人民を召集すると名づけられるとすれば、私は彼等を召集しないとは斷言することが出來ませぬ。同樣な理屈で、私の說敎も人民を召集すると言へるからであります。」

やがて判事とフォスタア氏とが再び私の側に來た。我々は說敎について尙尠しく議論した。けれどもその方法は私の心の外にあつたので、それを不問に附した。彼等は私が頑として動されず、說服せられざることを悟つた。

フォスタア氏は最初私を大變愛してゐるやうに見せた人であるが、今や判事に向つて、それでは私を牢獄に送らねばなるまいと語つた。それから又私を集會に來るやうにした人達をも臨席させた方が可からうと言つた。斯くして我々は別れた。

實際私は戸外に出た時、わが身に神の平和を運んでゐると言つてやりたかつたが、漸くそれを忍んでゐた。併し私は平和を保つた。主は祝福すべきかな。

わが憐れなる露魂に神の慰安を以て、牢獄へと送られた。

私は五六日牢獄に居つた。すると兄弟等は私を囚人仲間から救け出す手段を講じた。(私の收監狀には保證人の見つかるまで保留するといふことになつてゐた)。彼等はエルストウの判事であるクラムプトン氏といふ人の許へ往つて、私を四季開廷裁判所に出廷させるやうに乞ふた。最初彼はさうしてやらうと言つた。然るにその後それを躊躇して、先づ第一に私の收監狀を見たいと言つた。その主意は、私がこの郡で幾度も非國敎徒の禮拜をして、英國敎會の政治を大に輕んず云々といふのであつた。彼はそれを見て、この收監狀に明記してある以上の事がこの者に對してあるのだらうと言つた。彼は未熟な靑年なので、これに携はるわけには往かぬと言つた。典獄はその事を私に話してくれた。私は尠しも怖氣づかず、寧ろ歡んだ。主が私に聽きたまへる事を明に見たからである。私は判事の許へゆく前に、神に祈願した。私が牢獄にをるよりも、自由な身である方が一層善事を爲すことが出來るならば、自由におかしめたまへ。然らざれば、御意を成さしめたまへ。私の入牢がこの國の聖徒を目醒ますといふ

やうな望みがないわけでもない。故に私は何れを選ぶべきかを語ることが出來なかつた。唯この事を神に任せた。實際私は再び牢獄に歸つてから、嬉しくもわが神に遇つた。神は私の牢獄にをることが御旨であり聖意であることを知らせて、私を慰め、又私を滿足させられた。

再び牢獄に歸つてから、判事の不得要領な答を默想してゐると、次の言葉が勢好く心に浮んで來た。曰く、「彼は猜忌のために彼等がおのれを賣せることを知れり。」

要するに私の牢獄に居ることになつた理由と方法とはかやうであつた。私は牢獄に起臥して、神の好意を待つた。神の歡びたまふ如く私になさしめたまはんことを祈つた。わが頭の髮の毛一本でも、天に在すわが父の聖意でなくば地に落つることはないと悟つたからである。人の横暴と惡意とは決してそれほど大きなことを許されぬ。彼等は神が彼等に許されるほか、それ以上の事は出來ぬのである。それより遠くに往くことは出來ない。彼等が最も惡いことをした時でも、「凡ての事は神を愛する者のために働いて共に益をなすことを我等は知

る」(〇廿八)のである。いざさらば。

(二) 判事キイリン、判事ナエスタア、判事ブルンデール、判事ビーチャア、判事スナッグ等の前にてわが審問の大畧は左の如し

私が七週間牢獄に起臥してから、四季開廷裁判所はこの郡のためにベッドフォードで開かれた。私はそこへ曳出された。典獄は判事等の前に私を連れて往くと、起訴狀が私に對して申告された。その內容は次のやうである。ベッドフォード町の勞働者であるジョン・バンヤンは斯く〳〵の境遇の人物である。彼は(斯く〳〵の時から)非道にも毒惡にも神聖なる禮拜に連なるために敎會に來ないやうになつた。そして種々不正な集會や禮拜會の公共な司導者になつて、わが大君である國王の法律に反對して、大にこの王國の善良なる臣民を騷がせ惑はせた云々。

書記。これが朗讀されると、裁判所の書記は私に向つて言つた。「これに就て何か申し立てることがあるか。」

バン。私は言つた。「その初めの部分について申せば、私は神の教會に對して普通の出席者でありました。又恩寵に依つて、基督を首とせる人民の一員であります。」

キイリン。判事キイリンは言つた。(彼は當法廷の裁判官であつたので)、「然しながら汝が教會に出席するかといふ意味は、國立教會へ神聖なる禮拜をなすためにといふのである。」

バン。私は答へた。「いや、私は出席いたしませぬ。」

キイリ。彼は私に尋ねた。「何故か。」

バン。私は言つた。「私は神の言葉の中にさやうに命ぜられてをる個所を見出さないからであります。」

キイリ。彼は言つた。「我々は祈ることを命ぜられてをる。」

バン。私は言つた。「けれども普通祈禱書に依つて祈れといふのではありませぬ。」

キイリ。彼は言つた。「それなら甚麼してか。」

バン。私は言つた。「靈を以て祈るのであります。使徒も、『われ靈を以て祈らん、又悟性を以て祈らん』と言つてをります。」

キイリ。彼は言つた。「我々は靈を以て祈つても、悟性を以て祈つても、又普通祈禱書を以て祈つても差支へない。」

バン。私は言つた。「普通祈禱書の祈禱は他の人が作つたもので、我々の心に働く聖靈が作つたのではありませぬ。使徒は靈を以て又悟性を以て祈らんとは言つてゐますが、靈と普通祈禱書とを以て祈れとは言つてをりませぬ。」

すると他の判事が言つた。「汝は祈禱とは何んだと思つてゐるか。それは人民の前に、若しくは人民の中に二三の言葉を口にすることだと想ふのか。」

バン。私は言つた。「いえ、さうではありませぬ。人間は幾らでも立派な言葉や優れた言葉を口にすることが出來ます。それでも完き祈りとは申しませぬ。人が祈るといふ時は、何か欲しいといふ知覺(その知覺は靈に依つて生れたもぬ。

のでせうが)、それに依つておのが心情を神の前に基督を通して注ぐことであります。その言葉が他の人のなすやうに多くないでも可い。優れてゐないでも可いのであります。」

判事等。彼等は言つた。「それは眞實だ。」

バン。私は言つた。「それは普通祈禱書がなくとも差支へなく出來ることであります。」

判事の一人(判事ブルンデールか判事スナッグであつたやうに想ふ)は言つた。「汝は先づ祈禱文を書いて、それを人民に向つて讀まさないと申すのか。」

彼は笑ひながらさう言つた。

バン。私は言つた。「筆と紙を執つて、二三の言葉を書いて、それを持つて往つて人民の集會で讀むといふことは、私共のやりませぬ所であります。」

判事。「それならどうすると申すのか」と彼は言つた。

バン。「足下、それは私共の作法では御坐いませぬ」と私は言つた。

キイリ。判事キイリンは言つた。「普通祈禱書その他同樣な形式を用ゆることは正當である。基督は祈ることをその弟子に敎へられた。それはヨハネがその弟子に敎へたと同樣であつた。一個の人が他の人に向つて祈ることを敎へることが出來ぬと申すか。信仰は聽く事に依つて生ずるのである。一個の人は罪について他人に信せしむることが出來るのである。それ故祈禱は人間が作つて、それを讀んで、人々に祈ることを敎へたり、又祈ることを助けたりすることが出來る。」

彼が恁う言つてゐる間に、神はわが心に羅馬書八の廿六を想ひ浮べさせられた。(聖靈も亦われらの荏弱を助く。我等は祈るべき所を知らざれども、聖靈自ら言ひがたき慨歎を以て我等のために祈りぬ)。神は私が以前それに就て考へなかつたから、この言葉を想ひ浮べさせられたに相違ない。判事が話してゐる間に、それは鮮かにわが心に浮んだ。その聖語が、「自分を取れ、自分を取れ」と言つてゐるやうに、判然と私の前に置れた。

バン。私は言つた。「足下。聖書には『われらの荏弱を助くる聖靈』があると言つてあります。私共は祈りたくつても、どうして祈るのか知らぬのであります。

けれども靈は私共の仲介となつて、口言ふべからざる嘆息と呻吟を洩してくれるのであります。祈ることを私共に敎へるのは、普通祈禱書ではなく、聖靈であります。『聖靈われらの荏弱を助く』と使徒は言つてゐますが、普通祈禱書はわれらを助くとは言つてゐませぬ。

「主の祈禱についても、『我等の父よ』云々と口で言ふことは容易でありますが、靈に滿されて、その祈禱の最初の二語を言ふことの出來る者は極めて稀であります。即ち新に生れるといふ事を能く悟つて、又自分は神の靈に依つて生れたことを實驗して、神を『我等の父』と呼ぶことの出來る者は極めて稀であります。斯る實驗がないならば、凡て無意味なる語に過ぎませぬ。」

キイリ。「それは眞實である」と判事キイリンが言つた。

バン。私は尙進んで言つた。「御言葉によれば、一個の人が他の者に罪のあることを信ぜしむるとか、信仰は耳に聽くことから來るとか、一個の人がいかに祈るべきかを他の者に話すことが出來るといふことでありますが、私は唯人々が互にその罪を語ることは出來るが、それを信ぜしむるのは聖靈であると申すのであります。

又信仰は聽くことに依つて來ると言はれますが、聽くことから信仰を心情に起させるのは聖靈であります。然らざれば聽くことに依つて何等の益もないのであります。

それから一個の人がいかに祈るべきかを他の者に語ることが出來るといふことでも、前にも申したやうに、聖靈の助けがなければ、祈ることも、おのが境遇を神に知らせることも出來ないのであります。これを爲すことの出來るのは普通祈禱書ではありませぬ。『我等の罪を我等に示すところの聖靈』であります。又『救主を我等に示すところの聖靈』であります（ヨハネ十六〇十三）。又その聖靈は私共の心情を刺激して、必需物のために神に來る願望を起させ、『言ひがたき慨嘆』を以て、我等の靈魂を神に向つて悲しまするのであります。他の言葉も同じ主意であつて、皆このために置れたものであります。」

キイリ。判事キイリンは言つた。「然らば汝は普通祈禱書に對してどう思ふか」

バン。私は言つた。「足下、御聽き下さるならば、それに對する私の考を申上

げませう。」

キイリ。彼は言つた。「差支へない。然し一應先づ注意しておくことがある。それは普通祈禱書を惡口せざることである。そんな事をすると、汝にとりて非常な不利益である。」

パン。そこで私は一歩を進めて言つた。「私の最初の理由はそれが神の言葉に命令してありませぬことであります。それ故私はそれを用ゆることが出來ませぬ。」

他の判事。一人の判事は言つた。「汝がエルストウやベッドフォードに往かねばならぬといふことは、聖書の何處にも命令してないではないか。然るにそこに往くことは正當であるか、どうぢや。」

パン。私は言つた。「エルストウに往つたり、ベッドフォードに往くことは、私用の事で、命令されてないでも、重大な事ではありませぬ。それにまた神の言葉は使命に依つて何處へでも行くことを私に許してをります。けれども祈ることは神の聖なる禮拜の大部分を占めてゐるのでありますから、神の言葉の規約

に從つて爲さねばならぬもので御坐いませう。」

他の判事。判事の一人は言つた。「此者の言ふことは治安妨害である。最早語らしめぬが可い。」

キイリ。判事キイリンは言つた。「いや、いや、怖れるには及ばない。我々の制度は一層善良である。此者が妨害をなすことは出來ない。普通祈禱書は使徒時代から存在するものであるから、それを教會で使用するのは正當である。」

パン。「普通祈禱文の記してある使徒の書翰か、それを讀むことを命令した聖書の一句でもありますならば、その個所をお見せ下さい。さうしますれば私はそれを使用いたします。さもなければ、それを使用する心のある者は差支へありませぬ。私はそれを妨げは致しませぬ。尠くとも私共だけはそれがなくつても神に祈ることが出來ます。神の御名は祝福すべきかな。」

そこで判事の一人は。「汝の神は何か。ビールゼバッブか」と言つた。それのみならず、彼等は幾度も、「私が惡靈や惡魔に囚はれてゐる」と言つた。私は悉く斯る言葉を受け流した。主よ、彼等を赦したまへ。それから又私は言つた。「主は

祝福すべきかな。私共は一緒に集ひ、神に祈り、互に勸めをなすことを奬勵されてゐます。それは神が私共の裏に嬉しくも在したまふからであります。神の聖名は永遠に祝福すべきかな。」

キイリ。判事キイリンはこれを行商人の佛蘭西語（ねわけのわかふ意）と呼んだ。「汝は僞善的口吻を棄てねばならぬ。主よ、此者の眼を開きたまへ」と言つた。

パン。私は言つた。「私共は今日と呼ばれる此の一日〳〵に互に勸めをなさねばなりませぬ。」

キイリ。判事キイリンは私が說敎する必要がないと言つた。それから私が何處に權威を持つてゐるかといふやうなことを尋ねた。

パン。私は言つた。「私が現在やつてゐるやうに神の言葉を說敎することが正當であることは證明が出來ます。」

キイリ。彼は私に言つた。「いかなる聖語に依つて？」

パン。私は言つた。「彼得前書四章の十、十一及び使徒行傳十八章に依つて。」

尙澤山擧げやうとすると、彼は言つた。「控へよ。それで澤山、先づ初めのはど

ういふのか。」

パン。私は恁う言つた。「神の各樣の惠みを司どる善き宰の如く、各人その受けし所の賜物を以て互ひに施すべし。人若し道を語らば神の示と思ひて語るべし」云々。

キイリ。彼は言つた。「その聖語を汝に尠しく說き明してやらう。『各人その受けし所の賜物を以つて』といふのは、商業の才能を受けた者はそれに從へといふのである。又汝のやうに鍊物師の才能を受けた者は、その鍊物に從事せよといふのである。又他の人はそれ〳〵その職業に從事する。そしてその職業は神聖である」云々。

パン。私は言つた。「否、足下、使徒が茲に言ふ所は、聖言を宣傳ふることであります。それは最も明白であります。この數節を照合せて見ると、次の節にある『人若し道を語らば、神の示と思ひて語るべし』といふのは、この賜物といふのが何であるかを說明してゐます。聖靈は茲で種々な職業を神から受けた賜物として働かすといふことを勸めたのでないことは明かであります。」

私は尙語を進めやうとしたが、彼はそれを許さぬのであつた。

キイリ。彼は言つた。「我々は自分の家族に丈はさうしても差支へないが、その他には可かん。」

パン。私は言つた。「二三の人に善をなすことが正當でありますならば、尙多くの人に善を爲すことも正當でありませう。自分の家族に勸諭をなすことが善き義務でありますならば、他人に勸諭をなすことも善でありませう。兎に角神の聖顏を索ねるために集會をなし、又基督に從ふために互に勸めをなすことが罪でありますならば、私は矢張罪を犯すことにいたしませう。止むを得ぬことであります。」

キイリ。彼は「議論するために聖書に熟達してゐない」と言つた。「又議論すべき言葉にも熟達してゐない。そして最早これ以上私を忍ぶことが出來ない。汝はこの起訴狀を認めるや否や」と言つた。

今まで氣づかなかつたが、今や私は起訴されてゐることを知つた。

パン。私は言つた。「これを私は認めます。私共は澤山の集會をして、神に祈つたり、互に勸めたり、又嬉しくも主が現に私共の裡に在すことを感じて心を勵まされました。神の聖名は祝福すべきかな。私はこれ以外には何も自分の罪あることを認めませぬ。」

キイリ。やがて彼は言つた。「汝の判決を聽けよ。汝は再び牢獄に送致せられて、そこに三個月間居らねばならぬ。三個月の末に、汝が敎會に往つて聖なる禮拜に連ならず。そして說敎を止めぬならば、汝はこの領分から追放されねばならぬ。追放を命ぜられた後に、この領分に見出さるゝならば、若しくは國王の特赦を得ずして、再び歸つて來てゐることが見出さるゝならば、汝はそのために絞殺されねばならぬ。これは明に言ひ渡しておく。」

彼は私を曳出すために典獄を呼んだ。

パン。私は彼に語つた。「この事について、私は申上げやうとしてゐた所であります。私は今日牢獄から出づるならば、神の助力に依つて明日からでも再び福音を宣傳へるつもりであります。」

他の判事も私に何か言はうとしたが、典獄が私を曳き出したので、私は彼の

言つたことを語ることが出來ぬ。

斯くして私は彼等から離れた。審問の時にも、又牢獄に歸つてからも、心氣爽快であつたことを主耶蘇基督に感謝する次第である。それからして私は基督が、「凡て汝等に仇をなす者の辯駁して抵抗し能はざる口と智慧とを我なんぢに與へん」（ルカ廿一〇十五）と言はれた言葉はつまらぬことでないことが解つた。基督の平和は人これを我々から取ること能はずである。

私の審問の要領はかやうであつた。これを讀み、これを聽く凡ての人々に、主よ、益をあたへたまへ。いざさらば。

（三）治安官と私との間に交へられた議論の要領。

彼は法律に觸れて入牢せる私を訓戒するために來たのである。

私は十二週間牢獄に居つた。彼等が私をどうしやうと言ふのか尠しも解らなかつた。然るに一六六一年四月三日コッブ氏が私を訪ねられた。その言ふ所によれば、私を訓戒するために判事から遣はされたのであつた。私が英國教會に柔順ならんことを求むるためであつた。その時の議論の内容は次のやうである。

コッブ。彼はこの牢獄に來て、房から私を呼び出した。私が彼の側へ往くと、彼は言つた。「バンヤン。御變りもないか。」

バン。私は言つた。「有難う御坐います、大變丈夫です。主のお影で。」

コッブ。彼は言つた。「私は卿にお話し仕たいことがあつて來ました。他でもないが、どうか國法に從ふやうにしてもらひたい。さもないと次の開廷裁判所には益々卿の不利になつて、この國から放逐されるか、もつと惡い事になるかも知れぬ。」

バン。私は言つた。「私は人間となるために、又基督者となるために、この世の中では身を賤しくしたいと思つてゐます。」

コッブ。彼は言つた。「けれども卿は國法に從うために、これまでやつて來た集會を止めねばならぬ。それは直接成文法に抵觸してゐる。判事が私を派遣し

たのは、卿が從はぬならば、その法律を卿に適用しやうとしてゐることを語らせるためなのだ。」

バン。私は言つた。「足下。私は恁うして唯今法律に依つて入牢してゐますが、その法律は私に及ぶべきものでも、私を罪するものでも、又私が屢々やりました集會を批難するものでもないと私は想つてゐます。法律に觸れるのは、その集會に依つて惡事を企つるからでありませう。宗教上の運動を以てその惡事を蔽ふ口實とするからでありませう。明に又單純に主を禮拜し、教化のために互に勸めをなすことを唯一の目的とする內密の集會は法律の禁ずる所でありませぬ。私が他人と集りをなす目的は、勸諭と相談とに依つて、出來るだけ善い事をしやうといふ他はありませぬ。それは神が私に賜つた幾分の光明によるのでありまして、國家の平和を紊すことでは御坐いませぬ。」

コップ。「誰でも同樣な事を言ふ」と彼は言つた。「先頃の倫敦の暴動（アゲエンナの暴動）でも立派な口實の下に起つたことを御存じであらう。それでも實際彼等は王國と民政とを滅ぼさうと企てたに相違なかつた。」

バン。彼等の行動は私の嫌ふ所であります」と私は言つた。「併し彼等がそんな事をした故に、他の者もさうするといふことは言へませぬ。國王の政府に忠信なることは男子たり基督者たると同樣に私の義務と心得てゐます。何か事が起れば、私は言葉に於ても行爲に於ても、歎んでわが大君に忠義を盡すつもりで居ります。」

コップ。彼は言つた。「私は議論の出來る男ではない。だが、バンヤン君。卿は眞面目にこの事を考へて、おのれを屈せねばなりますまい。唯內密の談話で隣人に勸めをなすことは自由であるが、人民の集合を催してはならぬ。さうした方が實際、基督の教會に餘計盡せるわけである。それなら差支へない。法律は卿にそれを吝しみはしない。法律に觸れるのは、卿の內密に催す集會である。」

バン。私は言つた。「足下、私が談話に依つて一人に善いことをして差支へないならば、何故二人に善い事が出來ないでせう。二人に善いことをして差支へないならば、何故四人に又八人にさうすることが出來ませんか。」

コップ。彼は言つた。「成程、百人にもといふのだらう。」

バン。「さうです」と私は言つた。「私は出來るだけ善い事をすることを禁じられる譯がないと想ひます。」

コップ。彼は言つた。「卿は善い事をすると辯解しても、やはり人民を誘惑するので、害をなすのである。それ故卿が害をなさんことを恐れて、大勢の人を集むることを禁止されたのである。」

バン。私は言つた。「法律は私が隣人に談話をすることを許すとの仰せですが、確に法律は人を誘惑することを許さぬと思ひます。それ故私が法律に依つて一人の者に談話して差支へないのは、確に彼に善い事をするからでありませう。談話に依つて一人の者に善い事をして差支へないとすれば、確に同じ法律に依つて、大勢の人に善をなして差支へない筈です。」

コップ。彼は言つた。「法律は明に卿の内密に催す集會を禁ずる。それ故斯る事は許されぬのである。」

バン。私は彼に言つた。「私はエリサベス法典若しくは女王法典の第三十五條に於て國會の刻薄を想ふやうなことはありませぬ。その法律に依つて彼等が神を禮拜する或る儀式を壓迫したり、神の道を妨害したりしやうとしたとは考へませぬ。唯人々はそれを曲解して神の道に違反するのであります。その法律をその儘に正解すると、それは唯宗教を上衣にしたり、旗幟にしたり、口實にしたりして、心の中や、又集會で禍惡を釀す人々を戒しめたものでせう。その法典の言葉は、『いかなる會合にても、宗教の旗幟或は口實の下に云々』と御坐います。」

コップ。「成程。それ故國王は口實がいつも人民の中にあるのを見たまふのである。即ち宗教を口實となすことを見たまうのである。それ故國王もその法律も斯る内密の集會を禁じて、唯公けの集會を許すのである。卿も公けに集會をするが宜しい。」

バン。私は言つた。「足下、比喩を以て御答へしますと、それは恰度森の隅に、常も盜賊が來て、惡事を働いてゐる場合に、そこから來る者は誰でも殺さるべしといふ法律を作るやうなものではありませぬか。正直なる人も盜賊と同じやうにその森から來ることがないでせうか。これは恰度その場合である。民政を

破壊せんとする者も多く御坐いませう。けれどもそれ故に凡て内密の集會は不法であるとは言へますまい。唯法に叛く者のみが、罰せられるのである。又若しも私の會話に男子たり基督者らしからざる所がありますならば、私を所罰して下さい。私が公けに集りをして可いといふ御言葉が實際でありますれば、私は歎んでさう致します。公けに集りをさせて下さるならば、唯内密にそれをしてゐますのと同樣であります。公けに集りが出來なくなることを怖れて、當然内密の集會は止めます。私を咎め立てする人が、教理でも實行でも、その誤謬であり異端であることを證明することが出來るならば、私は市場に於てすら、悅んでそれを否認しませう。けれどもそれが眞理であるならば、私の最後の血が滴るまで動せぬつもりであります。私のさうする事を足下に讃めていたゞきたいと思ふ位です。誤謬と異端とは、二つの事である。私は異端ではありませぬ。それは聖言に反對することには何に一つとして我儘な辯護をしやうとせぬからである。私が何か誤謬に執着するならば、それを證明して下さい。私はそれを改めます。」

コップ。彼は言つた。「善人なるバンヤンよ。卿が公けの集會を催すといふやうなその一事をそれほど嚴格に固守する必要はないと思ふ。そんな集會をせずとも、近所の人に教を語るだけで、澤山善い事が出來るではないか。卿は服從が出來ぬのか。」

バン。私は言つた。「誠に私は自分を高く揚げやうとは思ひませぬ。寧ろ自ら卑く考へてゐます。尙ほ私が自ら最も賤しうする時に、主の人民を教化するために、神が私に賜つた幾分の光明を用ひんと心掛けるのであります。それのみならず、主が恩寵を迺して、幾分でもわが働きを祝福せらるゝを見る時、神が人民を善くするために私に與へたまふた賜物を用ひずしてはゐられないのであります」。私は尙一歩進んで言つた。「差支へなければ、公けに語ることを歎んでしたいと思ひます。」

コップ。彼は私に公けの集會に來て、説教を聽いても可いと言つた。「卿は説教をなさずとも、それを聽くことが出來る。卿だけが大變發明であつて、他の人以上に賜物を受けてゐると考へないで、他の人の説教も聽いたらどうだ。」

バン。私は彼に言つた。「教へられることは教訓を與へると同じやうに私の好む所であります。何れも私の爲すべき義務だと思ひます。教師である者も、又他の教ふる人から學ぶ方が可いのであります。使徒も」凡ての人に學ばせんがために、一人々々預言することを得ればなり」(コリント前十四〇卅一)と言つてゐます。それは即ち神から賜物を受けた者は誰でも、他人を慰むるためにそれを施したが可い。さうすると、又他人から聽いたり學んだり、慰めを受けたりすることが出來るといふのであります。」

コップ。彼は言つた。「卿は暫く忍び、靜に坐つて、どんなに成行くか、見てゐたらばどうか。」

バン。私は言つた。「足下、ウイクリッフ(殉教者列傳でウイクリッフの教理論の顚末を抜に引用したのを讀んだのは)は怎う申してをります。人々から破門されることを怖れて、神の言葉を說教し又聽くことを止める者は、既に神から破門されたのである。そして審判の日には、基督の謀叛人として數へられるであらうと。」

コップ。彼は言つた。「成程、他人の說を聽ない者は謀叛人の中に數へられる。それ故卿は聽きなさるか。」

バン。私は言つた。「足下、ウイクリッフは說教し又聽くことを止める者はと言つてをります。即ち人を教化する賜物を受けてゐる者が、その賜物の割合に從つて、勸諭もせず相談にも預らざることは、彼の罪であります。他人の說教ばかり聽いて凡てその時を費すも亦その罪であります。」

コップ。彼は言つた。「卿が賜物を受けてゐることをどうして知つたら可いか」。

バン。私は言つた。「誰にでも聽せて詮索させて下さい。それから聖書に依つてこの教理を調べて下さい」。

コップ。彼は言つた。「二人の公平なる者がこの事柄を決定したとすれば、どうです。その判決に任せるか。」

バン。私は言つた。「その人達に錯誤はありますまいな。」

コップ。彼は言つた。「それは無い。」

バン。私は言つた。「私の判斷はその人達と同じやうに正しいといつて宜しいです。併し何れでも差支へないとして、この事柄は聖書に依つて判斷してもら

ひたいと思ひます。さうすれば錯誤がない、又過つことは出來ないのであります。」

コップ。彼は言つた。「卿が聖書の一方を主張し、彼等が他の一方を主張するとせば、誰がその間の判斷をするか。」

バン。私は言つた。「聖書が致します。一つの聖語を他の聖語に較べることに依つてそれが出來ます。正當にそれを比較しますと、自から明かになつて參ります。例へば仲保者といふ言葉でも種々に解釋されますが、その眞理を知らうと思へば、聖書はそれを明かにします。仲保者となる者は二人の間に事を處理せねばならぬ。仲保者は『一人につける者にあらず。されど神は一位なり。又神と人との間に一位の仲保あり。即ち基督耶蘇なり』(ガラテヤ三〇廿前二〇五)。それから又聖書は基督を圓滿とか完全とか適任の祭司長とか呼んでゐます。それからして基督が人と呼ばれ又神と呼ばるゝことが明かであります。基督の血も亦同樣なる事に依つて靈能あることを發見せられます。それと同じく聖書は集會をすると いふことについても、充分にそれを闡かにし、その意味を發見するのでありま

す。」

コップ。彼は言つた。「然しながら卿は教會の判決を受くることを好むか。」

バン。私は言つた。「然り、足下、神の教會の是とする所には從ひます。(教會の判決は聖書の中に最も善く言ひ表はされてあります)。

我々はこの他國家の法律や政府に服從することについて種々議論したが、能く記憶してゐない。私は國王のある時でも無い時でも、凡て正しき法律に從つて歩むやうに良心の束縛を感ずることを話した。若し私がそれに反對することをしたとすれば、斯る犯人に準備された法律の刑を甘んじて受くるを以てわが義務とするといふやうなことを、種々と述べ立てた。それから又私が內密に教をなすことの害なきことについても、或人から疑ひを受くるやうなことを斷つために、私は歎んで凡て自分の說教の草稿を誰れにでも見せることに力を盡さうと思ふと言つた。私が眞面目に願ふ所は、わが國の內に靜に住つて、現在の國權に服從することである。

コップ。彼は言つた。「バンヤン君、現在と四季開廷裁判との間に、この事を

真面目に考へて、自ら服從するやうにしてもらひたいものである。この土地に靜に住んでゐられるならば、善い事も澤山に出來やうが、西班牙とか、コンスタンチノオプルとかその他の世界の端に追ひやられることになつたら、卿の友人に何の益をなすことも出來まい。又卿は彼等にどんな善い事も出來ぬではないか。どうぞ溫柔くしてくれ。」

「實際」と典獄が言つた。「足下、此者に溫柔してもらひたいものです。」

パン。私は言つた。「國家の內にある間は、國家のために一身を委ねたいことは、敬虔に又正直に私の願ふ所であります。仰せの如く私がそのやうな處分を受けねばならぬとすれば、神は斯る待遇を忍ぶやうに私に力を添へられることを望みます。私は此事について何も惡をなさぬつもりであります。神の茲に在すことを信じて私は恁う申します。」

コッブ。彼は言つた。「聖書に、『在るところの權力は神の定むるものなり』と言つてあるのを承知してをるか。」

パン。私は言つた。「承知してゐます。主權者として國王に從ひ、又その遣はせる知事に從ふことでありませう。」

コッブ。彼は言つた。「それならば國王は卿に內密な集會をなさぬやうに命令してゐる。それは國王の法律に叛いてゐる。そして國王は神の任ずる所である。故に卿は集會をしてはならぬ。」

パン。私は彼に言つた。「パウロはその當時の權力者が神の命ずる所であることを認めましたが、それでも彼は屢々彼等のために牢獄に投ぜられました。それから又耶蘇基督もピラトに向つて、我は汝に對して神の權力のほか此世の權力を有せずと言はれたが、尙ほ彼は同じピラトの下に死にたまふた。パウロや基督が治者を拒絕し、神の任命を輕んじて罪を犯したとは言へますまい。足下。法律に服從することに二つの仕方があります。その一つの方法は、自分の良心に訴へて、自動的にさうなさねばならぬと信じて服從することである。自動的に服從が出來ぬならば、彼等が私になさんとする所を甘んじて受くるために橫になつてゐたいと思ひます。」

茲に於て彼は靜に坐つて、何も言はなかつた。それを見て私は、彼が溫かに

柔しく自分と議論したことを彼に感謝した。そして我々は袂を別つた。

あゝ、我等は天に於て出遇はんことを。いざさらば。

(四) わが妻と裁判官その他の人々が次の巡回裁判所にて私を放免することに就て談話せる所次の如し。これは妻自身の口述せる所に據る

私はその後彼等から追放か絞罪かの宣告を受けた。判事の判決によれば、これまでいかに說諭しても、私が取消しをせぬ故にといふのであつた。私が國を棄つる誓をさせられるか、一層の極刑に處せられる（コップ氏はかう言つた）時が近づいた時に恰度、國王即位のことがあつた（一六六一年四月廿三日）。國王戴冠式の折にはその戴冠のために各種の囚人を放免するのが例であつた。その特赦は私にも及ばんとした。然るに彼等は私が既決の罪人であるといふので、赦免を哀訴しなければ、それに與ることが出來ぬと言つた。併し戴冠の勅令は國王即位の日から十二ヶ月の間、哀訴の自由を與へた。それ故彼等は幾千の囚人と同じやうに、私を牢獄から出さうとしなかつたが、併しその宣告を私に執行しやうともしなかつた。それは赦免を哀訴する自由が告示されてゐたからである。それでも私は一六六一年八月に開かれる土用裁判所と言はれてゐる次の巡回裁判所まで牢獄に留置された。

その巡回裁判所に於て私は正當である限り有ゆる手段を講ぜずにはおかなかつた。私はわが妻をして三度裁判官に訴願して、私の言ひ分を聽き、公平にこの事件を熟考せんことを乞はしめた。

最初わが妻は裁判官ヘールの許に往つた。彼は甚だ溫かに彼女の手から訴狀を受取つて、私と妻とに出來るだけの便宜を與へてやりたい。併し何もしてやることが出來ぬかも知れぬと言つた。翌日また、事務多端のため私のことを忘れられてはと氣遣つて、他の訴狀を裁判官ツイスドンの馬車に投込んだ。彼はそれを見て、わが妻を叱り付けた。そして聲荒く、私が既決の罪人なので、今後說敎せざることを約束せぬ以上、赦すことは出來ないと言つた。

その後妻はまた裁判官ヘールに向一度訴狀を出したが、其時彼は判事席に坐つてゐて、歡んで彼女に耳を貸した。唯そこに居合したチエスチア判事が進み寄つて、私が法廷で宣告せられたこと、又私が熱情漢(といふやうな言葉を用ひた)なので、打棄てゝ自分は一切關係せぬつもりであると言つた。けれどもわが妻はこの高官に勵されて、再び判事等の前へ往つた。(憐れなる寡婦が不義なる裁判官になしたやうに)。そして彼等がこの町を去る前に、出來るだけの事をして、私を自由な身にしやうと試みた。彼女が往つた場所は鵠の部屋であつた。二人の裁判官と多くの判事と此地方の身分ある人達がそこに集つてゐた。彼女は内氣な顏と打震ふ心情とを以てその部屋に入つて、先づかやうにその用向を述べた。

女。「貴方樣(と裁判官ヘールの方へ身を向けて)、厚顏しくもまた參りました。私の良人はどうなりますものか御伺ひしたいと存じまして。」

裁判官ヘール。彼はわが妻に言つた。「婦人よ。前にも言つたやうに御身に何も善いことを仕てあげることが出來ない。御身の良人が裁判所で語つた所に從つて罪を宣告されてゐるので。それを打消すやうな事がないと、御身に何も善い事をしてあげられぬ。」

女。彼女は言つた。「貴方樣、良人は不法にも牢獄に繫れてをるので御坐います。集會に對して何の告示もない前に囚へられたので御坐います。公訴狀も虛僞で御坐います。その上良人は有罪であるか無いか、尋ねられたことも御坐いません。公訴狀を承認したこともないので御坐います。」

一人の判事。誰か知らぬが、側に立つてゐた一人の判事が、「閣下、彼は正當に服罪したのであります」と言つた。

女。彼女は言つた。「それは間違で御坐います。良人は公訴狀を承認するかと申されましたので、唯自分は種々集會をして、聖言を說教したり、祈りをしたり、集へる人々に神の在すことを話しただけと言ひましたさうです」。

裁判官ツィスドン。茲に於て裁判官ツィスドンは大變怒つて恁う言つた。「御身の良人は平和の攪亂者で、法律に依つて服罪せしめられたことは、既に記錄に記されてゐる。それを今更我々がどう出來ると思ふのか」云々。

そこで裁判官ヘールは法典の書物を取り寄せさせた。

女。彼女は言つた。「ですが、貴方様、良人は正當に服罪したのでは御坐いません。」

チエスタア。そこで判事チエスタアは言つた。「閣下、彼は正當に服罪したのであります。」

女。「それは間違で御坐います」と彼女が言つた。「服罪させなさるやうに皆さんの仰やつた言葉が良人の白狀したやうになつてしまつたので御坐います。(前にも御聽きになりましたやうに)。

チエスト。「だがそれは記錄されてをる。婦人よ、それは記錄されてをる」と判事チエスタアが言つた。恰かもそれが記錄されてゐる故に必ず眞實でなければならぬやうに思つてゐるらしい。彼はさういふ言葉で、屢々彼女の口を緘ませやうとした。それが記錄されてゐる。それが記錄されてゐるといふ外に彼女を說服する何等の理屈もないやうであつた。

女。彼女は言つた。「貴方様。私は良人を自由な身にしたいために、暫く倫敦

に居りました。そして貴族院議員のバアクウッドさまにも話して、嘆願書を差出しました。その御方はそれを御取り上げ下されて、貴族院のさる方々に良人の放免のことを御謀り下さいました。その方々はそれをごらんになつて、自分達には放免してやることは出來ない。次の巡回裁判所で、裁判官に放免させるほかはあるまいと御言ひであつたさうで、さる方からその事を伺ひました。それで私は貴方様方がこの事をどう遊ばして下さるかと存じまして、恁うして御目にかゝつた次第で御坐います。放免するか、御助けあそばすかして下さいませぬか」と言つた。彼等はそれに就て何等の答もしなかつた。恰かもそれを聽かぬ振をしてゐた。

チエスト。唯判事チエスタアは幾度か恁う言ひ張つた。「彼は服罪した。それは記錄されてをる。」

女。「記錄されてゐましても、それは間違で御坐います」と彼女が言つた。

チエスト。「閣下」と判事チエスタアが言つた。「彼は毒蟲のやうな男です。かやうな男は此國にまたとありませぬ。」

ツイス。「御身の良人は說教を止めるであらうか。止めるならば、彼を呼び迎へよ。」

女。彼女は言つた。「貴方樣、良人は口を利くことが出來る間は說教を止めぬさうであります。」

ツイス。「これである。さやうな男に對して何も語る必要はない。彼が記名したやうに爲さねばなるまい。彼は平和の攪亂者である。」

女。彼女は再び彼に言つた。「良人は平和に暮したいと申してをります。その職業に從事して、家族を養ひたいと申してをります。それに貴方樣、私には頑是ない四人の小さな子供が御坐いまして、その一人は盲目であります。皆さま方が慈善を垂れて下さらぬと、生活が出來ないのであります。」

ヘール。「御身が四人の子供を持つてをる？」と裁判官ヘールが言つた。「御身は四人の子供を持つには若すぎるではないか」。

女。「貴方樣」と彼女が言つた。「私はその子供等には繼母で御坐います。未だ結婚しましてから滿二年になりませんので。實を申せば、良人が初め捕はれました時、私は姙娠中で御坐いました。年若で、そんな事には慣れませんので、私はそれを聽いて周章へました爲めに、產氣づいて、八日間惱みまして、漸く身二つになりましたが、子供は亡くなりました」。

ヘール。裁判官ヘールは此事を大變眞面目に考へて、「あゝ、氣の毒な婦人だ！」と言つた。

ツイス。けれども裁判官ツイスドンは彼女に語つた。「彼女は貧乏を上衣にするものである。」それから又彼は、「私が職業に從事するよりも、說教してあちこち驅け廻つた方が生活が仕易い」ことが解つたと言つた。

ヘール。「彼の職業は何にか」と裁判官ヘールが言つた。

その側に立つてゐる仲間の或人が、「鑄物師です、閣下」と言つた。

女。「さやうで御坐います」と彼女が言つた。「良人は鑄物師で貧しう御坐いますので、賤しめられます。公平な裁判をしていたゞくことも出來ません。」

ヘール。裁判官ヘールは至極温和に答へた。「婦人よ、御身の良人はそんなわけで服罪せしめられたものと見える。そこで御身は國王に直訴するか、赦免を

哀訴するか、誤謬の文書を得ねばならぬ。」

チエスト。然るに判事チエスタアはこれを聽いてその意見を述べた。特に誤謬の文書と言はれたのが癪に觸つたやうであつた。そして言つた。「閣下、彼はこれからも說敎します。記入した所のことを爲します。」

女。「良人は神の言葉のほか何も說敎しませぬ」と彼女が言つた。

ツイス。「彼が神の言葉を說敎すると申すか！」とツイスドンが言つた。そして彼は彼女を驚かさうと思つたか、「あちこち馳け廻つて、害をなすのだ」と附言した。

女。「いゝえ、貴方樣」と彼女は言つた。「さうでは御坐いませぬ。神さまは良人を認めて下されて、良人に依つて澤山善いことをなされますのです。」

ツイス。「神よ」と彼は言つた。「彼の敎理は惡魔の敎理である。」

女。彼女は言つた。「貴方樣、義しい裁判官が現はれますれば、良人の敎理は惡魔の敎理でないことが解りませう。」

ツイス。「閣下」と彼は裁判官ヘールに言つた。「この婦人にお願ひなされず、追

ひ返しなされまし。」

ヘール。やがて裁判官ヘールは言つた。「氣の毒だが、婦人、何も善い事をしてあげることが出來ない。御身は前に言つた三つの事の一つを爲さねばなるまい。即ち國王に直訴するか。良人の赦免を哀訴するか、誤謬の文書を得るかである。この中誤謬の文書を得ることが一番容易であらう。」

茲に於てチエスタアはまた癇癪に觸つたやうであつた。その帽子を脫いで、怒つて頭を搔きむしつた。

（彼女は言つた）。そこで私は良人を呼出して、直接これに語らせて下さい、さうしたら、彼等が彼に對して種々要求する所に就て、私がするよりも一層滿足なお答が出來ませうと言つたが、無駄であつた。大概忘れたが唯一つ記憶することは、私が初めてその部屋に入る時びく〳〵してゐましたが、そこを出る前に、泣かずにはゐられなかつた。彼等が私に對し又わが良人に對して無情である事よりも、いかにも彼等は憐れな人達であるので、主の再臨の折、その肉體に於て仕たことは善いことでも惡いことでも萬事答へねばならぬのに、その時どん

な悲しい報告を與へられるのかと想つたからです。

私はそこで彼等と別れましたが、その時法典全書は持參された。彼等がそれに就て言へる所を私は全く何も知りませぬ。彼等から何も聽きませんでした。

(五) 一六六二年正月十九日に開かれたる次の巡回裁判所にて神の眞理の敵手が私に對せる態度

この二度の巡回裁判所の間に起つた事は省きたいと思ふ。私が典獄に依つて最初よりか種々な自由を許されたことや、神の人民を訪問する折がありさへすれば、例の通り說敎したことや、耶蘇基督の信仰に確立せんことを勸めたり、普通祈禱書などに觸れないで、凡ての點に於て基督者の採るべき方向を示す神の言葉を念とし、「耶蘇基督を信ずることに依つて、神の人の完きを得て凡ての善き事を行ふに缺くる所なからん」(三〇十七後段)ことを注意したりした。それから又餘程自由を與へられたので、倫敦の基督者を訪ふたこともあつた。私の敵はそれを聽いて、大變に怒つた。彼等は典獄の位置を奪ひかねなかつた。そして

これを告訴し、出來るだけ辛い目を見せるぞと脅かした。彼等は又私がそこへ往つて、陰謀を企て、一揆を起さうとするのだと攻擊した。その讒言であることは神知りたまふ。それ故わが自由は前よりも狹られた。戸外を眺めてもならぬといふのであつた。次の巡回裁判所が開かれたのは、(一六六一年)十一月十日であつた。私は極めて敏速に扱はれんことを待望んだ。然るに彼等は私を看過して、呼び出さゝらんとした。それ故私は一六六二年正月十九日に開かれる次の巡回裁判所まで留置れねばならぬのであつた。私は裁判官の前に出たいと思つて、罪人の人名目錄の中に私の名を入れておくことを典獄に乞ふた。それから裁判官や執行官は友人として私を呼び出すことを約束してくれた。恁うしておけば自分の願望も遂げられるだらうと想つた。然るに凡ては無駄であつた。巡回裁判所が開かれた時、私の名は目錄の中にあり、裁判官や執行官は私が彼等の前に現はれることを約束したに係らず、判事や治安官は延期するやうに取計つて、出廷を許さぬのであつた。私は彼等の私に對する態度を一々知らなかつたが、治安官(コッブ氏)が私の最大なる反抗者の一人であることだけは知れた。

な悲しい報告を與へられるのかと想つたからです。

私はそこで彼等と別れましたが、その時法典全書は持參された。彼等がそれに就て言へる所を私は全く何も知りませぬ。彼等から何も聽きませんでした。

(五) 一六六二年正月十九日に開かれたる次の巡回裁判所にて神の眞理の敵手が私に對せる態度

この二度の巡回裁判所の間に起つた事は省きたいと思ふ。私が典獄に依つて最初よりか種々な自由を許されたことや、神の人民を訪問する折がありさへすれば、例の通り說教したことや、耶蘇基督の信仰に確立せんことを勸めたり、普通祈禱書などに觸れないで、凡ての點に於て基督者の採るべき方向を示す神の言葉を念とし、「耶蘇基督を信ずることに依つて、神の人の完きを得て凡ての善き事を行ふに缺くる所なからん」(三〇十七後段)ことを注意したりした。それから又餘程自由を與へられたので、倫敦の基督者を訪ふたこともあつた。私の敵はそれを聽いて、大變に怒つた。彼等は典獄の位置を奪ひかねなかつた。そして

これを告訴し、出來るだけ辛い目を見せるぞと脅かした。彼等は又私がそこへ往つて、陰謀を企て、一揆を起さうとするのだと攻擊した。その讒言であることは神知りたまふ。それ故わが自由は前よりも狹られた。戸外を眺めてもならぬといふのであつた。次の巡回裁判所が開かれたのは、(一六六一年十一月十日)であつた。私は極めて敏速に扱はれんことを待望んだ。然るに彼等は私を看過して、呼び出さゝらんとした。それ故私は一六六二年正月十九日に開かれる次の巡回裁判所まで留置れねばならぬのであつた。私は裁判官の前に出たいと思つて、罪人の人名目錄の中に私の名を入れておくことを典獄に乞ふた。それから裁判官や執行官は友人として私を呼び出すことを約束してくれた。恁うしておけば自分の願望も遂げられるだらうと想つた。然るに凡ては無駄であつた。巡回裁判所が開かれた時、私の名は目錄の中にあり、裁判官や執行官は私が彼等の前に現はれることを約束したに係らず、判事や治安官は延期するやうに取計つて、出廷を許さぬのであつた。私は彼等の私に對する態度を一々知らなかつたが、治安官(コッブ氏)が私の最大なる反抗者の一人であることだけは知れた。

最初彼は典獄の許に來て、私を裁判官の前に出してはならぬ。それ故目錄の中に載せてはならぬと言つた。典獄は彼に向つて、私の名は既に載せてあると言つた。コッブ氏はそれを取消せと言つた。典獄はそんな事は出來ぬと言つた。それは私の名を載せた目錄の一つを裁判官に、他の一つを執行官に差出したからである。茲に於て彼は甚だ不機嫌であつたが、未だ典獄の手にあつた目錄を見たいと言つた。典獄がそれを渡すと、彼はそれを見て、これは虚僞の目錄だと言つた。彼はその目錄を取つて、典獄が記しておいた私の罪狀を抹殺した。そして恁ういふ主意の言葉を手づから書いた。「ジョン・バンヤンは牢獄に下さるべし。不法なる集會及び秘密集會を催せることに對して法律上服罪したれば也」云々。彼はこれだけでは物足らぬと思つて、先づ巡回裁判所の書記官の許に走つた。それから判事の許へ往つた。私の進退を妨ぐるために有らん限りの手段を講じてから、又典獄の許に歸つて來た。そして典獄に向つて、私が裁判官の前に出て放免せられるならば、彼をして適當と認むる私の謝金を拂はしめやうと言つた。それから次の巡回裁判所には虚僞なる目錄を作れる廉に依つて、彼を訴へるつもりであると言つた。典獄自身は私が其後知れる所によれば、實際よりも一層惡いわが罪狀を作れるのであつた。斯くして私は又その時裁判官の前に出づることを妨害された。そして牢獄に留まつた。いざさらば。

五　バンヤンの入牢に對する回想

久しき間基督の光榮ある福音を宣言して、約五年これを説教したが、私はこの國の善良なる人民の集會で逮捕された。（若し彼等が許さば、私はその日説教する筈であつたが、彼等は人民の中から私を拘引した）。そして判事の前に私を曳き出した。判事は次の開廷裁判所に私を呼び出すまで保釋を許さうとした。けれどもわが保證人は最早人民に説教せぬやうに私を束縛することに同意しなかつたので、尚ほ私を留置した。

裁判所に於て私は不正なる集會及び秘密集會の主催者及ひ維持者として、又英國教會の國民的禮拜に歸依せざるものとして起訴せられた。判事の間に商議をこらせる後、彼等はその自稱せる如く、腹藏なく私に起訴の理由を自認させて、私が遵奉することを拒む故に、永久の追放に處したのであつた。そこで私は再び典獄の手に渡されてから、牢獄に歸つた。そこに起臥すること茲に滿十二年、神が此等の人々をして私をいかに處置せしめんとなされるかを見んとて待つのであつた。

恩寵に依つて私は多くの滿足を以てこの境遇を續けた。その間主と惡魔と自分の敗德とから、わが心情には幾轉回幾變遷があつた。（耶蘇基督に榮光あれ）、私は多くの事からして、幾多の確信と教訓と悟達とを受けた。それに就ては茲に十分話す餘地がない。唯一二の暗示を讀者に與へやう。即ち私の一言に依つて讀者は敬度の念を刺戟して、神を祝福し、私のため祈りたまふであらう。又それに奬勵せられて、自ら斯る場合に立至らば、人が彼等に爲し能ふ所を怖れざるに至るであらう。

私は全生涯に今ほど神の言葉に透徹する大なる入口を見出したことはない。前には何も悟れなかつた聖語は、裸體の中にある私に輝やくのであつた。耶蘇基督は又決して今のやうに眞實で且つ光耀したとはなかつた。茲に私は誠に耶蘇を見、耶蘇を感じた。あゝ、「我等前に爾曹に告ぐるに巧みなる怪しき譚を用ひざりき」（ペテロ後一〇十六）といふことや、「爾曹は基督を甦らせ、且つこれに榮光を與へたまひし神を基督によりて信ずる者なり。この故に爾曹の信仰と望とは神に由

れり」(ペテロ前一〇廿一)といふことは、繦繈の裡にある私にとりて祝福の言葉であつた。

次の三四の聖語は又私にとりて大なる慰藉であつた。曰く、「爾曹心に憂うるなかれ、神を信じ又我を信ずべし。わが父の家には第宅おほし。然らずばわれ豫じめ爾曹にこれを告ぐべきなり。我なんぢらのために所を備へにゆく。若し往きて我なんぢらのために所を備へば、又來りて爾曹を我に納くべし。わが居る所に爾曹をも居らしめんとて也。爾曹わが往く所を知り、又その途を知る」(ヨハ十四一―四〇)「われ此事を爾曹に語りしは、爾曹をして我にありて平安を得させんがためなり。爾曹世にありては患難を受けん。されど懼るゝ勿れ。我既に世に勝り」(ヨハ十六〇廿三)。「それ爾曹は死にし者にてその生命は基督と偕に神の中に藏れをるなり。我等の生命なる基督の顯れん時、我等もこれと偕に榮光の中に顯はるゝなり」(コロサイ三一―四)。「されど爾曹の近づける所はシオンの山また活る神の城なる天のエルサレム、千萬の衆すなはち天使の聚集、天に錄されたる長子どもの致會、また衆の人を鞫く神、および完成せられたる義人の靈魂、新約の仲保なる耶蘇および灌ぐ所の血なり。この血の言ふ所はアベルの血の言ふ所よりも愈れり」(ヘブライ十二一―二四)。私が此等の言葉を味つてゐる間は、破滅を笑ひ(ヨブ五二一)、馬とそれに騎者とを怖れざることが出來た。私は獄中に於て嬉しくもわが罪の赦免を見、來世に於て自分が耶蘇と偕に在ることを見た。あゝ、シオンの山、天のエルサレム、千萬の天使の聚集、凡ての人を鞫く神、完成せられたる義人の靈魂および耶蘇は、獄中にある私に懷かしきものであつた。私は獄中に於いて、到底この世にあつては、言ひ現はすことの出來ぬ所を悟得せしめられた。私は次の聖語の眞理なるを見た。曰く、「爾曹耶蘇を見ざれども之を愛し、今見ずといへども信じて喜ぶ。その歡喜は言ひがたく、且つ榮光に滿てり」(ペテロ一八前)。

私は凡ての危機に於て、又自分を惱すために惡魔の有ゆる誘惑に於て、神が私の側に立ちたまふことを尠しも知らずにゐた。然るに今や獄中にありて、それを見出したのである。怖れる心はいかに扶くるもの勵ますものを得んとしたかを見よ。然り私は謂はゞ唯わが影のほか何も怖るゝものがないのに驚起したのであつた。それでも神はいと柔しくも、わが惱みを忍ばれなかつた。一二の聖語を以て凡てに對して私を强められるのであつた。そこで私は屢々、正當な

事であらば、一層大なる慰安を得るために、一層大なる困難を求めたいと言つた。「幸福ある日には樂しめ、禍患ある日には考へよ。神はこの二者を相交へて降したまふ。これ人をしてその後の事を知ることなからしめん爲めなり」(傳道之七〇四十)。「そは基督の苦しみ我等に多くあるが如く、我等の安慰も基督によりて多くあればなり」(コリント後一〇五)。

私は牢獄に投ぜられる前に、身に振懸る所を察した。そして特に二つの思慮がわが心情に醸れた。その第一の思慮は、死に處せられる時、いかにせば適當に死に出遇ふべきかといふにあつた。これに就て哥羅西一の十一は、私にとり大なる知識であつた。即ちそれは「神の榮の權威に循ひて賜ふ諸の能力を得て強くなり、凡ての事歡びて忍び、久しく耐え」んことを祈ることである。私は入牢前には稀に祈りに往くことが出來た。然るに一年以上引き續いて、この文言即ち快美なる嘆願は謂はゞわが心に進入して來た。そして永き苦痛の年月を過さんとせば、歡んで忍ぶところの忍耐を要することを私に勸告した。

第二の思慮に就て、次の言葉は私にとりて大に役立つた。曰く「且つ我等心の

中に死の宣告を持てり。この故におのれを恃ずして死にし者を甦らする神を恃めり」(コリント後一〇九)。この聖語に依つて悟つたことは、若し私が正當に耐えんと欲せば、先づ第一に此世の事と呼ばるべき物に悉く死の宣告を下さねばならぬことであつた。自分や、妻子や、自分の健康や、自分の喜悅を初めとして、自分にとりて凡て死せる如きもの、又彼等にとりて死せる如き自分といふやうなものは、即ちそれである。

第二は保羅が他の場所にて言へる如く、見えざる神に於て生くることである。即ち元氣を失はざる途は、「見ゆる所のものを顧みず、見えざる所のものを顧ることとなり。そは見ゆる所の者は暫時にして見えざる所の者は永遠ければ也」(コリント後四八〇十)。私は自ら推論した。若しも私が唯牢獄のために用意してゐると、笞が不意に來る。頭手架も亦來るのである。そして私が此等の事に用意しても追放された時に困る。それから追放を一番惡いものだと想つてゐると、死が來るので、吃驚せざるを得ない。それ故に私は悟つた。苦痛を通過する最善の途は、來るべき世に關して、基督を通して神に頼ることである。又この世に關しては、「陰

府をわが家と想ひ、わが牀を黑暗に展べ、打腐に向ひて、汝はわが父なりと言ひ、蛆に向ひて、汝はわが母、わが姉妹なりと言ふ」(十三、十七〇十四)にある。即ちこれらの事をわが身に習熟するにある。

けれども斯る助力にも係はらず、私は自ら虛弱を以て圍まれた人であることを見出した。わが妻と憐れなる子供等に別れたことは、獄中にありて屢々、骨から肉を引割くやうな想ひがした。それはこの大なる賜物を多少愛し過ぎてゐる故であるのみならず、又わが憐れなる家族から私を取去るならば、彼等が遭遇せんとする困難、不幸、貧窮を屢々心に浮べたからである。殊にわが憐れなる盲目の子供は他の者以上にわが苦勞の種となつた。わが憐れなる盲目の子がどうなるか、その困難を想へば、わが腸は千切れるやうであつた。

いとしき子よ、悲哀は御身がこの世における運命か。私は御身の上を風の吹くさへ忍びざるに、御身は擊たれねばならぬ。乞食せねばならぬ、餓と寒と裸とその他幾千の災禍に苦しまねばならぬ。それでも私はいかに急に御身と別れることになつても、自分を棄てゝ、御身のことを凡て神に委せねばならぬと想

つた。あゝ、斯る境遇にある私は、妻や子の頭の上に家を引倒す人のやうであつた。尙ほ私はこれを爲さねばならぬ。これを爲さねばならぬと想つた。今や私は「二つの乳牛をとりて他國にエホバの櫃を運ばしめ、その犢を家に閉込めたる」(サムエル前六〇十一)人々を想はざるをえなかつた。

けれども此誘惑に對して私を助けたものは種々なる恩慮であつた。その中特に三つを名ざすことが出來る。第一は次の二つの聖語を思ひめぐらしたことである。曰く、「汝の孤子を遺せ、われ之を生存しめん。汝の寡婦は我に倚賴むべし」。又「主いひたまふ。われ誠に汝に益を得せしめんために汝を惱す。われ誠に敵をしてその艱難の時と災禍の時に汝に求むることをなさしめん」(エレミヤ四九〇十一、十五〇十一)

私は又恁ういふ思慮を持つた。若し私が神のために凡てを賭せぬであらうとも、凡てわが憂慮に氣をつくることを神に約束せんことである。若しも私が自分の身や心に來る凡ての困難を怖れて、神とその途とを棄つるとも、私は自分の職務を僞らないのみならず、私の憂慮もそれほどでないと思つた。神の足許にあつて、御名のために立つのと、神の道を拒んで、自分で心配してゐるのと

は、大變な相違である。これは極めて鋭い思慮で、わが肉體には刺馬輪のやうであつた。基督はユダに對して祈られた。それは神が彼をして主を賣らんとする私欲なる思想を失望せしめんことであつた。その聖語は、益々私にこの思慮を結び落くるに與つて大に力があつた。心を靜めて次の語を讀め。曰く、「願くは彼の上に惡しき人を立て、その右方に敵を立しめたまへ。彼が鞫かるゝ時はその罪を陽にせられ、又その祈は罪となり、その日は尠なし。その職務は他の人にえられ、その子輩は孤兒となり、その妻は寡婦となり、その子輩はさすらひて、物乞ひ、荒れたる處より出で來りて、食を求むべし。かゝる人は憫れみを施すことを想はず、反りて貧しき者、乏しき者、心の痛める者を殺さんとして攻めたりき」(詩百九篇六—十六)。

私は又他の思慮を持つた。それは人々が確に預らねばならぬ所の地獄の苦痛の怖れと十字架の怖れと一緒になつて、人の子輩の前に基督とその言葉と律法とを宣言するに憚るに至ることである。私は又神が信仰と愛と忍耐とを以てその途を踏る人々に準備された光榮を想つた。信仰宣言のためにわが心身を不幸に曝さねばならぬといふ思想は心を痛く刺激するのであるが、斯る事は私に力を添るのであつた。

私は實に信仰宣言のために追放せられんことを想ふて、次の聖語を考へた。曰く、「石にて擊れ、鋸にてひかれ、火にて焚れ、刀にて殺され、綿羊と小羊の皮を衣て經あるき、乏しくして艱み苦しめり。世は彼等を置くに堪へず」(ヘブライ十一〇廿七、廿八)。彼等は世の中に住居するにはあまり惡人であつたのである。私は又聖靈邑毎に我に示していふ。繩縛と患難われを俟てり」(使徒行廿〇廿三)といふ言葉を考へた。時として私は追放流竄の痛ましく悲しき狀態に於て、しかも彼等が飢と寒さと危險と裸と敵と數多の災禍とに曝さるゝことを想ひめぐらした。遂には憐れな羊の如く溝の中に死するに相違ない。けれども神に感謝す。私がこの最られも感じ易い道理に依つて心を動かさず、寧ろそれに依つて益々神にわが心情を受容れられしことを。

一つの好き例を讀者に語らう。私は嘗て幾週の間何んとも言へぬほど、甚だ悲しく低き狀態にあつたことがある。その時私は未だ年の若い囚人であつて、

法律を熟く知らなかつた。そこでこの入牢は當然絞首臺に終りはせずやといふ考がわが心に横在つた。それ故に惡魔は私に執着して、わが心の駒を狂はせんとて、かやうに暗示するのであつた。「卿が實際死せんとする時、斯る狀態にあらば如何。即ち神の事を喜ばず、又卿の靈魂が今後一層善き狀態に至る證據を持なかつたらば如何」。

實際その時凡て神の事はわが靈魂から隱れてゐた。そこで私は初めこれを想ふて、大に心を惱ました。現在の境遇このまゝでは、死するに適せざることを悟つた。死を命せられても、死ぬことが出來るとは考へられなかつた。それのみならず、若しも私が絞首臺の梯子を登るのに這ひ上るやうな眞似をするならば、身を慄はすとやそのカ拔した素振が、いかにも臆病であるために、神とその人民の途を批難すべき機會を敵に與ふるやうなものであると想つた。これは私にとりて大なる惱みであつた。この如き原因のために、蒼い顏をして、ぶるぶる膝を慄はせて死ぬのはいかにも耻かしいと想つた。

私は神が自分に慰安を與へたまはんことを祈つた。神が私に命じたまへる所

を爲し又それを忍ぶ力を與へたまはんことを祈つた。けれども慰安は現はれなかつた。相變らずそれは隱れてゐた。又その時死ぬといふことばかり考へられて、頸に繩をつけて梯子の上にあるやうに想ふことが屢々であつた。けれどもそれは私を勵した。私の死ぬのを見物に來る群衆にわが最後の言葉を語る機會を與へられると想ふからである。若しさうなるならば、神が私の最後の言葉に依つて唯一人の靈魂を悔改めしめたまふならば、わが生命は投げ棄てられ、又失はれても差支へないと想つた。

凡て神に屬ける事はわが眼界の外にあつた。誘惑者は尙ほ私に隨いて來た。けれども「卿は死んで何處へ行かねばならぬか。卿はどうなることであらう。來世に於て何處に卿は居るべきか。天と榮光と潔められたる者に對する世嗣たる權とに對していかなる證據を卿は有するか」。かやうに私は幾週の間心を攪亂された。爲すべき術を知らなかつた。遂に「自分がこの境遇にあるのは神の言葉と途とのためである」といふ思慮が重くわが胸に落ちた。それ故に一本の毛の廣さほどもそれから逡巡ざらんことを努めた。

私は又神が今自分に慰安を與ふると、死の刹那にそれを與ふると何れを選びたまふかを考へた。けれども私はそれに依つてわが信仰の宣言を爲すべきか、爲すべからざるかを定めることは出來ない。私は束縛せられてゐる。けれども神は自由である。然り、神が永久私を輕視したまふか、最後に私を救ひたまふか、その何れにも係らず、神の言葉に確立するはわが義務である。斯る刹那に到着せざる中は、邁んで進み往き、慰安を得るとえざるとに係らず。基督と偕にわが永遠の位置を賭してゐると考へた。神が來りたまはずとも、「盲目滅法に絞首臺の梯子から永遠の裡に飛び込んで見やう。沈むか泳ぐか、天へ行くか、地獄へ行くか。主耶蘇よ、爾は私を捕えたまふや否や。捕えたまはずとも、私は爾の聖名のために遣つて見やうと思ふ。」

私がこの決心を定むるや否や、「ヨブ豈に求むる所なくして神に使へんや」といふ言葉がわが胸に浮んで來た。惡魔はそれを批難して言つた。「主よ、ヨブは義しき人にあらず、彼はおのれを利せんがために爾に使へるのである。」爾は彼のまはりに藩屏を設けたまふにあらずや。されど爾の手を伸べて、彼の一切の所有物を擊ちたまへ。さらば必ず爾の面に向ひて汝を詛はん」(ヨブ、十一〇)。義しき人の表徴はこれであるか。一切を取去れし時に神に使へんとすることであるか。いかに取去られても、何をも求めずして神に使ふるは敬虔なる人であるか。神は祝福すべきかな。私は義しき心情を持んことを望む。神のたまへる力を以つて私は苦痛のほか何をも持ずとも、わが信仰宣言を決して拒むまじと決心したからである」。斯く想ひめぐらせる時、次の聖語は私の前に置れた。曰く、「得るところなくして爾の民を賣り、その價によりて爾の富を增したまはざりき。汝われらを隣人にそしらしめ、我等を周る者に侮らしめ、嘲けらしめたまへり。又諸の國の中に我等を語草となし、諸の民の中に我等を頭振るゝ者となしたまへり。わが凌辱終日わが前にあり、わが顏の恥われを蔽へり。こは我を誚り、我を罵る者の聲により、我に仇し、我に怨みを報ゆる者の故によるなり。此等のことは皆我等に臨みきつれど、我等なほ汝を忘れず。汝の契約を僞り守らざりき。我等の心退ぞかず、我等の步調なんぢの道を離れず、されど爾は野犬の住家にて我を傷つけ、死の蔭をもて我を蔽ひたまへり」(詩四十四〇—十九)。

今やわが心情は慰安に充ちた。その慰安は眞摯ならんことを望んだ。私にはこの多量なる試煉が是非なければならなかつた。それを想ふ毎にいつも私は慰められた。それから獲たる教訓のために、私は永久神を祝福したいと想ふ。これまで私に對してなされた多くの處置は、謂ゆる、「戰爭において獲たる物および分捕物を奉納してエホバの家の修繕に献げた」(歴代史略上廿六〇廿七)のであつた。

六 結辭

(一) 私が一生涯に出遇つた有ゆる誘惑の中、神の存在とその福音の眞理を疑ふことは最も惡かつた。それを支ふるのに最も惡かつた。この誘惑が來る時、わが身から帶を取去つて、わが立てる土臺を壞へされるやうであつた。あゝ、私は屢々次の言葉を想つた。「眞理を以て汝の腰の帶とせよ」。それから「基礎くづるれば、義しき者なにをか爲しえんや。」

(二) 罪を犯した後、私は神の手から嚴しき譴責の來らんことを待望んだ。然るにその際神からたまはつたものは、恩寵の發見であつた。又私が慰安を與へられた時、惱みに沈んだ自分を莫迦者と呼んだ。然るに私が愛へ悶へてゐる時、慰めをえんために自分を莫迦者と呼ぶのは賢くないと想つた。この二つの事は力と重さを以て私に臨んだ。

(三) 私は次の一事を大に驚嘆した。神が私の靈魂を訪れて、神御自身を發見せしめたまふやうな祝福を與へられずとも、私はわが靈が暗黑に滿されて、こ

れまで自分を爽快にしたその神、その慰安が何であるかを認めることが出來なくなつた時にでも、神は私に伴はれたことを見出した。

(四) 時には聖書の一行が言語に絶するほど昭然に解つたこともあつた。又他の時には聖書全體が棒のやうに無趣味であつたこともある。否、わが心情は聖書に對して無味乾燥であるのであつた。その全篇を眺めても心氣を爽かにするやうなことは尠しでも見出すことが出來なかつた。

(五) 凡ての恐怖の中、基督の血に依つて作られるものは最も善きものである。凡ての歡喜の中、基督に對する哀愁を混へたものは最も快きものである。あゝ、神の前に基督を腕に抱いて跪けるは、善い事である。私は斯る事の何れかを知らんことを望む。

(六) 私は當時わが心情にある七つの憎惡を見出した。一は不信仰に傾くこと、二、突然基督の現はせる愛と仁惠とを忘れること、三、律法の行爲に偏すること、四、祈禱中に想ひ紊れ、心冷かなること。五、祈れる事に對して氣を付ることを忘れること。六、動もすれば、持たぬ故に不平を鳴し、持るものを亂用すること、七、神が私に命じたまへることは何にもなす能はず、却つてわが敗德は縱に振舞ふこと。善をなさんとする時、惡が私に出現すること。

(七) 斯る事をば私は絶ず見たり感じたりした。それに依つて惱され壓着けられたのであるが、神の知慧はわが善のためにそれを用ひられた。第一、それは私に自らを嫌ふべきことを敎へた。第二、それはわが心情に賴ることを妨げた。第三、それは凡て生來の義が不充分なることを私に信ぜしめた。第四、それは耶蘇に飛びゆくことの必要を私に示した。第五、それは私を後押して神に祈らしめた。第六、それは注意して目醒めてゐる必要を私に示した。第七、それは基督を通して私を助け、この世を通して私を助けんとを祈るやうに屬ました。

七　バンヤンの晩年

讀者よ。この書の著者は苦心して勤勉にも地上におけるその生活の初年と中年について忠實なる感動すべき説話を卿等に與へた。尙ほそこに彼の生涯の晩年に起つた事で、注意し顧慮する價値ある事が殘つてゐる。それは時がなかつた爲めか、或はあまりに彌次的人民がやんやと讃めそやすのを怖れた爲めか、著者はそれを書き殘さなかつたのである。私はバンヤン氏の眞友として、又永き知己として、その香しからぬ初年から、立派なる最後に至るまでを能く知つてゐる。それ故自分の知つてゐることゝ、彼の友人達から供された正確な材料に依つて、あまり早く斷れた絲にこれを接ぎ合せて、彼が永遠の世界に入つたまでその絲を延したいと思ふ。

彼の誕生と教育。その若年の惡い習慣と敗德。彼が屢々爭ひ鬪へる誘惑。彼が見出せる仁惠と慰安と救拯。彼がいかにして福音を宣傳するに至りしや。彼に伴ひ來れる罵詈と批難と入牢。それにも拘らず、傳道を繼續して、神の恩寵の援助に依つて多くの人々を救へることなどは、彼が詳しく讀者に語れる所である。彼は順序正しく眞實の言葉を以て此等の事を自ら記した。それ故私は殘れる所だけを記すことにする。

彼は非國教主義のために十二年間以上も入牢してゐた。彼は獄中の閑時を用ひて種々善き書物を世界に供した。彼の忍耐は、當時リンコーンの監督であつた博士バアロウその他國立教會の人々を感動させた。彼等は彼の困難にして不條理なる苦痛を憫れんだ。そして彼を釋放するために盡力せる彼の友人達に大に味方した。彼は釋放せられねば、獄中の毒氣と虐待のために死んでしまつたに相違ない。兎に角彼は釋された。仁惠に依つて、その身につける拘束を振ひ落して再び自由になつた。(彼の靈魂につける拘束はその心情に充ち溢れたる恩寵に依つて前に破られてゐた)。そこで彼は艱難の中に慰めを與へてくれた人々を訪ね歩いた。そして人々の親切と大なる慈善とを基督者らしく感謝した。人々が時ならぬ災難や困難に遭遇でもしてゐると、自分の實例に依つて奬勵を與へた。良心に耻ざるために、又神の愛が耶蘇基督に依つて彼等の靈魂に注がる

るために忍耐してその苦しみを受けよと言つた。又ある人々がこの世の煩ひから意氣悄沈してゐるのを見ると、信實なる勸言を以て、これを助けるのであつた。それ故人民は彼の議論と訓誡とに依つて不思議な慰安を見出した。

折さへあれば屢々、彼は便宜の場所に人々を集めた。(法律は斯る集會を禁じてゐた)。そして人々が恩寵の内に生長するやうに、聖言の純粹な乳で彼等を養つた。又彼は何處にでも信仰の理由で捕えられて入牢させられた者があると、慈善の手を伸して。窮乏つてゐる者のために喜捨を集めるのを仕事の一つとしてゐた。

彼は病人を見舞ふことに大に心を用ひた。そして病中には起り易い誘惑者の暗示に對して彼等を强めた。それ故に彼等は病中に於て自分達を呑んとて吼ゆる獅子の力から自分達を救ひ出さんとする心を彼に與へたまふた神を永久に祝福するやうになつた。彼はまたどんな遠方な國でも、自分の援助を必要とする人があることを知るか想ふかすると、そこへ出かけてゆくのにどんな苦勞も骨折も吝まぬのであつた。彼は毎年二三回はかういふ訪問をやつた。そこで或る人人は勿論彼を嘲笑する意味で、監督バンヤンといふ綽名をつけた。又他の人々は彼が基督の葡萄畑であまり熱心に働くのを猜んだ。尙ほその間に彼は聖言の種を會衆の心情に播きつけた。神の恩寵を以てそれに水注いだ。それは澤山に芽を出して、基督の教會へ多くの弟子を持ち來した。

彼は又紛擾を解くことにその時を費した。そのために多くの禍惡を防ぐことが出來た。ある家族の零落せんとするを救つた。斯る葛藤に對して、彼は和解の手段を見出すまでは、苦勞したものである。そして彼は聖書に祝福を約束されてゐる平和を作る者となつた。實際彼はその一生を總括るために、斯る善き仕事を以て、晩年を送つた。

前の治世に於て、有ゆる宗派の非國教徒に良心の自由が不意に與へられ許された。その時彼の鋭敏なる才智はその覆被を貫いた。これまで永く苦しんだ困難なる迫害から突然かやうに釋放たれることは、非國教徒のためにならぬことを看破した。羅馬法王の徒が轉覆を企てつゝある、否、將に轉覆せんとしてゐる英國教會と同一な地歩を占めることは、非國教徒の利益ではない。そこで彼は非

國教徒に供給された有ゆる利益は、シリイの異常なる巨人ポリペムエスがユリイセスに許した所と同樣であることを先見した。即ちそれは先づその部下を喰はしておいて、最後は喰つてしまうのに都合の好いやうにするにある。バンヤン氏は他の人々の例に倣つて、良心の自由を受けた。神は良心の唯一の主である。故に善き良心の指導に從つて行ふのはいかなる時に於ても善き事である。又福音の嬉しき消息を宣傳へるのは、說教者にとりて美はしきことである。これを想へば、良心の自由、唯それだけを見れば、嘉納すべき事に相違ない。併し彼は凡てこれに就て警戒した。聖き恐怖に心を動した。罪のために我等の頭上に懸つて將に襲ひ來らんとする黑い暴風の如く、切迫せる審判を避けんがために熱心に祈つた。ニネベ人の救治は今や非常に必要であつた。そこで彼は最も永く住んで生涯の大部分をそこに費したベッドフォードの會衆を集めた。彼の敎を乞はんがために集まつて來る大なる會衆を容れるほど便宜な場所がなかつた。彼は會場を建てることについて彼等に相談した。彼等は嬉し喜んで任意に寄附をした。彼が初めてそこで敎をなすために現はれると、戸外に立たされた人も多くあるほど、會場は群集した。會場は大變廣かつたが、彼と同宗派の人々はわれもわれもと彼の敎訓にあづからんがめに先を爭つた。又會場開きに出席して、彼に好意を示さんとするものもあつた。彼は心の平和と靜穩とを以てベッドフォードに住んでゐた。神が彼に與へたまふ些少の收入を以て滿足した。この世の仕事から全く退隱して、傳道に身を委ねた。神がモーセに言ひたまへる如く、唇と心情とを作れる神は、雄辯と智慧とを與ふることを得るのである。豈に大學仕込みの異常なる學識を要せんやである。

當時凡ての市町の團體に整理者を派遣して、新しくこれを長官政治に作り直さうとされた。そのため或るものは廢免せられ、又他のものは就職させられた。バンヤン氏は惡い結果がそれに伴ふことを先見して、疲れ切るほど熱心にそれに反對した。そしてその會衆の中に斯ることのために欺かれる者がないやうに盡力した。その頃一人の大人物が或る用向を以てベッドフォードに來たが、バンヤンに使を送つて、官權の一地位を彼に與へんとした。けれどもバンヤンは決して彼に伺候せず、唯それを辭退した。

彼は著作と教訓との閑を見て、屢々倫敦に上つた。そして非國教派の會衆の中に往つて、その才能を用ひたが、聽衆は大にこれを歡迎した。彼が教育を受てゐない所から、誤解してゐた人達も、聖き事に對する彼の權威と知識とを信ずるに至つた。彼が明晰に力强く講述するのを聽いて、健全なる判斷を有する人であることを認めた。教化せられ矯正せられんとせずして、唯好奇心のために來た多くの見物人も、その聽ける所に甚だ滿足して去つた。猶大人が使徒等のことを驚いたやうに、「この人は何處から斯る事を持つて來たか」と不思議がつた。そして神がその葡萄畑に孜々として愉快さうに働く人を一層直接に扶けたまふことを考へぬのであつた。

かやうに彼はその大なる主にして先生なる永遠に祝福せられたる耶蘇に倣つてその晩年を費した。彼は善い事をして日を送つた。それ故最も烱眼なる批評家も、否惡意その者も、最も詳細に詮索し觀察して、正當に攻擊すべき彼の名聲の一汚點をも見出すことを斷念るであらう。バンヤン及びその宗派の者を輕蔑した人々や、彼を壓制した人々へ挑戰するために、特にこれを記す。彼は神から與へられた委任と命令とに從つて、その人々の心情を變ずるために、屢々祈つた。時には涙を流してその祝福を求めた。その結果は偶然にもそれほどの價値なき彼等の人柄や友人や親戚や家庭に於て見出されたであらう。神は信ずる者の祈禱を聽いて、それに答へたまふ。それは信ずる者を苦しむる人々へも答へられるのである。恰かもヨブがその悲しみの日に彼に對して批難の嘆聲を洩した三人のために祈れる場合のやうである。

彼の骨折と苦痛とを知れる人々の記憶を爽快にするために、又この書の讀者の心を滿足さするために、尙ほ尠しく彼の生涯に有りし事共を記して、その最後に及ぶことにしやう。

彼は鋭くもその生活の惡しき有樣を自認して、回心した後、會衆派の浸禮を受け、一六五五年その會員になるを許された。そして間もなく大變熱心な教師となつた。けれども一六六〇年チャールス王が位に復したので、十一月十二日、聖言を聽くために集つた善良な人民を教化してゐた際に、逮捕された。そして非國教徒特赦令の出づるまで、六年の間ベッドフォード牢獄に幽囚された。彼

が自由を獲たのは、その苦痛を憫れんだ信用あり權力ある人々の斡旋に依るのであつた。けれどもその後六年即ち一六六六年に彼は再び逮捕されて、又六年間幽囚された。典獄でさへ彼の嚴しき苦痛を憫んだ。恰かも埃及の典獄がヨセフになせるやうに、彼を囚人の頭にした。そこで彼は此度の入牢に於ては、「卿は神の子を信ずるか」と言つて、囚人に傳道した。この入牢は六年繼續した。それが終ると、又他の短い苦難に接した。半年間の入牢は彼の身に科せられた。この三回の幽囚の間に、彼は次の書物をものした。即ち「聖靈に依れる祈禱に就て」、「聖都の復活」、「恩寵溢るゝの記」、「天路歷程」の第一卷。

彼の十二年の入牢の最後の年に、ベッドフォードの會衆派の牧師が死んだ。彼は一六七一年十二月十二日に牧職に選ばれた。この職務中、彼は屢々自分に反對するために來た學者達と議論した。彼等は彼を無學なる人と想像したのである。然るに彼は明晰に議論した。語法や論理的語式に依らずして、聖書に依つて議論した。なほ彼はその會衆に反對せんとして來れる者を狼狽させた。我々は聖書正本の眞正の寫を持つか持ぬかと尋ねた。又彼が說敎してゐた時、彼を無慈悲だと批難した者があつた。それは「救はれる最も多くの人にあまり困難である」といふのである。それに依つて彼はその會衆の最も多くの人を救ひから排斥してゐると言ふのである。けれども彼はその人をやり込めた。そして磽地にまかれた種の譬喩、それから聖馬太の第十三章にある救主の舟からの說敎の一節を引いて、その人を沈默させた。凡て彼の論法は聖書を論據とした。彼は聖書に於て救ひの保證を見出さゞる故に、疑惑も躊躇も生せざる明白な場合でなければ、自分もそれを保證し決定することが出來ぬといふのであつた。

斯る事は一々擧ぐるに堪へぬ。誰も能く知れる所は、この人がその有ゆる事件を極めて精確に處置したことである。彼は殊にその事件を研究して、他人を怒りたい場合には、自ら多くの不便を忍んだ。いかなる損害を受けても、他人を批難し惡口することを愼しんだ。それはその會話に於てもさうであつたが、世に公けにしたその書物に於ても亦然りである。モーセの身體について、天使長と惡魔との爭論は聖ユダの書翰に見らるゝ通りである。それと同じく他人の罪を主に訴へることがなかつた。彼を迫害した批難者を怨まなかつた。

彼は自分の家に於て嚴格に祈禱と勸諭を行つた。彼はヨシュアのやうに。「われとわが家とに對して、他の人が何をなすとも、我等は主に仕へん」とするのであつた。祝福はその苦勞と苦心とに報はれた。詩の作者が言つたやうに、彼の妻は、「彼が家の壁を飾れる樂しき葡萄のごとし。彼の子供はその食卓をめぐれる橄欖の枝のごとし。主を怖るゝ人に施さるゝ所もかくやあらん」である。入牢と荒廢、それから生じた病氣などのために多くの損失を招いたので、彼の地上の財産は豐かになることはなかつた。彼は常に清淡なる生活をなした。凡ての寶の中最も大なるものを持てるので、それに滿足した。賢哲の言へる如く、「それは不斷の饗宴」であつた。

心に滿足があれば、身窄しき倭舍も王の宮殿である。この幸福を以て彼はその生活を久しく樂しんだ。この世の事にはあまり心を懸けなかつた。彼は順禮者として他國人として此世にあることを悟つた。この世は長く滯在すべき都ではない。彼はひたすら永遠の手を以ていと高き天に造られたる都にあこがれた。けれども遂に彼は苦痛と老年と數繁き說教のために疲れた。解脫の日は近づいた。死は靈魂が牢獄を脫して、一層光榮ある邸宅に轉居することである。けれども尙ほこの世における彼が最後の事業は愛と慈善との働きであつた。バンヤン氏の隣に住んでゐた若者がその父の不興を招いた。そしてそのために大變心を惱してゐた。その父は彼を相續せしめざるのみならず、既に讓つたものをも奪はうとした。その若者は此の事件を解決して、父の心を和げるに適當なる人としてバンヤン氏に依賴した。彼は快くそれを引受けた。そしてバアクシャイアのリージングにまで出かけていつて、その父の憤怒に對して理をさとしたり、愛を說いたりした。その父は柔和になつた。子に對する愛心は歸つて來た。

バンヤン氏は和解について最も善き處置をなしてから、倫敦に歸つた。その途で大雨にあつて、濡しよぼれて宿についた。そして激しい熱病に罹つた。病苦を忍びに忍んだが、その死の近づけることを知つた。早く死んで、基督の御許に往きたいといふほか何等の願望もないのであつた。死を所得として尊敬した。この世の生は幸福を待望みながらの、唯煩はしき滯在に過ぎない。その元氣は次第に衰へた。時は短く、病は激しき內にも、想ひ殘す所なきやう身の係累

を處置し、おのが心を整へて、遂にいとも仁惠深き賜主の御手にその靈魂を渡して、破滅の都から新しきエルサレムへと順禮したのである。

彼は一六八八年八月十二日(金曜日)、倫敦聖セバルクル牧會區スノウ・ヒルのスタアにおける雜貨商ストラッドック氏といふ人の家で死んだ。享年六十歳。僅に十日病んだばかりである。アアチラリー・グラウンドに近き新墓地に葬られた。彼はそこに復活の朝まで眠るのである。惱みも悲しみも最早彼を苦しめぬ。凡ての涙は拭はれた。唯ひたすらに光榮ある復活を望むのみである。

八　バンヤンの性格一斑

彼の容貌を見ると、嚴格で粗暴な氣質のやうであつた。けれどもその談話は柔しく慇懃であつた。何か大變な事でも起らねば、人に向つて饒舌したり議論したりすることがなかつた。自ら誇るやうなことは決してなかつた。いつも目を低く垂れて、自分のことは他人の判斷にまかせた。虛僞や誓言を嫌つた。その言葉には力があつた。仇を報ゆるやうなことはしなかつた。紛擾を解くことを好みて、誰とでも友達になつた。眼は鋭く敏かつた。人物を見分けることがいかにも上手であつた。善き分別と敏い智慧を持つてゐた。その人柄をいへば、身の丈高く、骨太であつた。併し肥滿してはゐなかつた。やゝ赤ら顏で、きらめく眼を持つてゐた。英國の古い流行に從つて、上唇に髭をはやしてゐた。髮の毛は赤かつた。年老ると、それが灰色に光つてゐた。鼻は格構好く、下向きもせず上向きもしなかつた、口は並の大きさであつた。額はやゝ高かつた。その動作はいつも率直で謹愼があつた。これはこの人の內外に對する公平なる描

寫である。その死は大變惜まれた。彼は眞に先憂後樂の人。幸運に誇らず、難に慄へざる人。常に最上の手段を保てる人であつた。

三つの大なる寶は彼に輝きぬ。

歴史家として詩人として先見の人として。

靜かなる土の中に彼を休ましめよ。

義しき者の復活に至るまで。

九 追記

この世の順禮に於て、神は彼に四人の子供を惠まれた。長女はメリーといつて盲目であつて、夭く世を逝つた。他の子供はトマス、ジョセフ、サラといつた。彼の妻エリザベスは彼が苦勞と悲哀とに打勝つて、その働きの報ひを受くるため此世を逝るに至るまで見屆けたが、長くは生き殘らなかつた。一六九六年彼女の信實なる順禮同行者の後に從いて、この世から彼の世へと旅立つた。

六十卷の彼の著作は讀者を敎化するために世に存してゐる。讀むべきかな、その作者よ。いざさらば。

罪人の長に恩寵溢るるの記 終

寫である。その死は大變惜まれた。彼は眞に先憂後樂の人。幸運に誇らず、艱難に慄へざる人。常に最上の手段を保てる人であつた。

三つの大なる寶は彼に輝きぬ。
歴史家として詩人として先見の人として。
靜かなる土の中に彼を休ましめよ。
義しき者の復活に至るまで。

九 追記

この世の順禮に於て、神は彼に四人の子供を惠まれた。長女はメリーといつて盲目であつて、夭く世を逝つた、他の子供はトマス、ジョセフ、サラといつた。彼の妻エリザベスは彼が苦勞と悲哀とに打勝つて、その働きの報ひを受くるため此世を逝るに至るまで見屆けたが、長くは生き殘らなかつた。一六九六年彼女への信實なる順禮同行者の後に從いて、この世から彼の世へと旅立つた。六十卷の彼の著作は讀者を敎化するために世に存してゐる。讃むべきかな、その作者よ。いざさらば。

罪人の長に恩寵溢るるの記 終

明治四十五年七月十五日印刷
明治四十五年七月十八日發行

定價壹圓四

譯者　松本雲舟

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地　村岡平吉

印刷所　横濱市山下町八十一番地　福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　警醒社書店
（振替貯金口座東京五五三）

同　東京市本郷區春木町二丁目廿三番地　警醒社支店

不許複製

文學士 小山東助君著

久遠の基督教

定價壹圓
郵稅十二錢

■著者は希臘思潮と佛教意義と基督教的信仰とを一心に融會せんとする第三王國の仰慕者な■
■りき而かも羊腸の路を辿りて今や高嶺の一角に立ち耶蘇其人の宗教に於て久遠の光明を發■
■見し得たり本書は其實驗に基いて基督教の本義を說ける一大獅子吼なり。■

ジョーセフ・コーサンド君著
加藤直士君譯

宇宙の統一

定價壹圓
郵稅八錢

■本書は一言で云へば科學より宗教へである著者は偶然にもベルグソンと同じ研究法を取つ■
■てゐる前半はエーテル、原子、磁氣、電氣、熱、光、エネルギイ、重力等を詳說し、後半■
■は是等の顯象及法則に統一あると共に物質界と心靈界の間にも更に大なる統一あることを■
■事實と論理と類推とに依て最も大膽明快に論斷してゐる。■

ジョン・バンヤン作
松本雲舟氏譯

聖戰

（再版）

定價壹圓拾錢
郵稅拾貳錢

本書はゼ・ホオリイ・ツオアの譯にして惡魔王のために占領せられし世界の主都を回復せんとする善王が聖き戰を叙したるもの、典型的ロオマンスなり。

エリオット女史作
松本雲舟氏譯

ドアビ・ムダア井

定價五拾錢
郵稅六錢

英國閨秀作家エリオット女史の傑作なり

基督教的思想

基督信徒の慰め ■内村鑑三著 定價四參拾錢 郵稅六錢

傳道の精神 ■内村鑑三著 定價四貳拾錢 郵稅四錢

求安錄 ■内村鑑三著 定價六參拾錢 郵稅六錢

後世への最大遺物 ■内村鑑三著 定價貳拾五錢 郵稅貳錢

逆境の恩寵 ■德永規矩著 定價六四拾錢 郵稅六錢

靈的實驗 ■宮川經輝著 定價六五拾錢 郵稅六錢

人生の慰安 ■宮川經輝著 定價壹圓八錢 郵稅四錢

靈性の危機 ■植村正久著 定價六四拾錢 郵稅六錢

信仰の友 ■植村正久著 定價六參拾錢 郵稅六錢

2214
20f